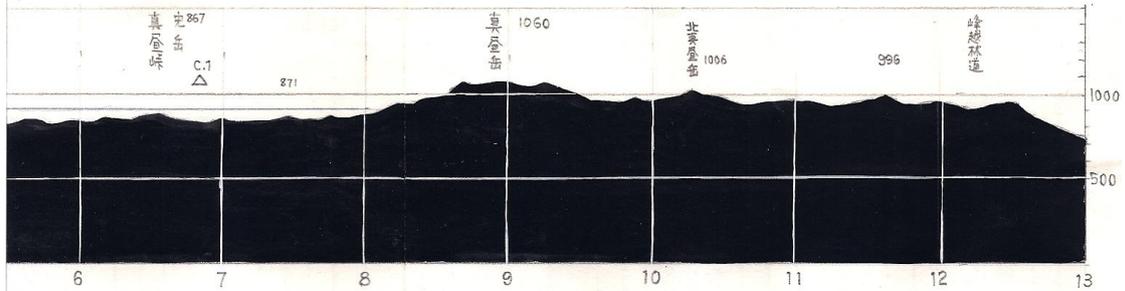


# 距離・高度・航程図

平成7年3月3日 製作

3/2 ~ 3/23



## 真昼山地積雪期縦走

平成七年 三月一日～二日

L 今出、佐藤芳樹、秋山、中島（一泊のみ）

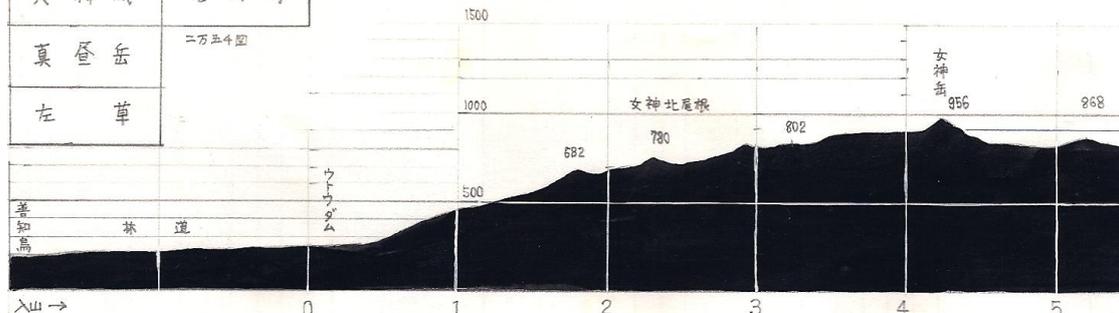
三月一日

昨夜は夜業となり就寝は一二時を廻った。四時に起きる予定で浅い夢の中で目覚まし時計を待たずに起床した。佐藤芳樹君の車は予定通り到着。戸外はバラバラ雨が降り天気が悪くてがっかりする。車は未だ寝静まった街を抜け集合地点の泉I・Cに急ぐ。既に中島車が前夜泊まりの秋山君と共に待機していた。真昼クラブ全員集合。五時東北自動車道に入る。前沢S・Aで中間休憩、食事や小憩の後、再びキンコンカンしながら真白い夜明けの岩手山に迫って車は進む。盛岡I・Cを抜けて四六号線を西進。街は雪一つない乾燥道路であったが仙岩峠に近付くと路面凍結、両側に雪の壁も現れてくる。仙岩トンネル入口に駐車。この駐車場に佐藤君のプリンターを五日間駐車することになる。一応フロントガラスから見えるように計画書を置いて装備を中島車に移動する。靴も登山靴に履き替えて四人とその装備、スキーなど彼の車は膨張した。

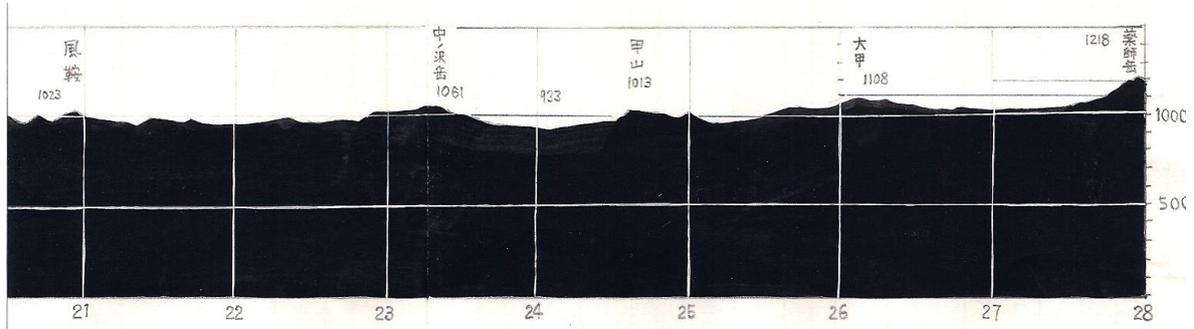
トンネル付近は一年前の偵察の時よりやや積雪量は劣っている感じがした。仙岩トンネル入り秋田県に入る。四六号線は角館街道とも称される道を過ぎ南西に折れ曲がって「さしまき」、「神代」、と走る。神代からJR田沢湖線を横切って「わらび座」を通り、地図があっても難しい大曲平野の巨大迷路に入っていく。直線道路がなくてすぐ突き当り左か右に曲がらなければならないアミダ道路で来るたびに悩まされる。真昼岳が白い山体を蔽らさせて次第に近づき、あつちだ、こつちだとナビゲーターが地図を視ながら指図して目的地善知鳥（ウトウ）に到着。大曲平野は海拔二五〇メートル程のせいか秋田側の雪の量

## 真昼山地積雪期県境縦走計画

田沢湖	国見温泉
抱返り溪谷	羽後朝日岳
大神成	北川舟
真昼岳	二万五千圓
左草	



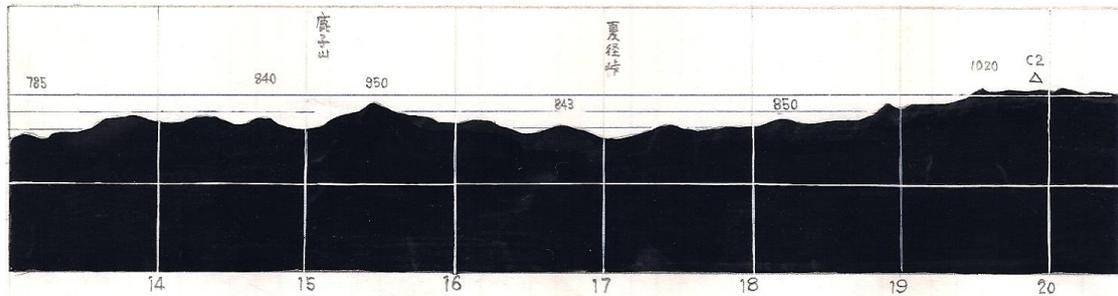
はがっかりする程少なく登山の障害になりはせぬかと心配である。善知鳥には民家がポツポツと何軒もありウトウ川に沿って二キロメートル程の林道をラツキーにも入る事が出来た、除雪の終点は造林作業の人々が焚き火をしていた。ジープが一台。間もなく鉄砲撃ちが一人帰ってきてジープを運転して帰っていく。ここでシールをスキーに貼りつけたり服装を整えたり中島車を安全な所に移動したりする。善知鳥の砂防堰堤の源地を越してソボ足で登山口標識まで入る。ここは大浅沢、向沢、水沢の三つの沢が集合する出合いの地であり、夏径は中央の向沢沿いに真昼峠へ突き上げる。大浅沢の奥に真白く真昼岳の西壁が聳え立ち四人一様にオーとその雄姿に感嘆の声を挙げるのだった。さて、夏径に至る大浅沢は橋があるので何気なく渡るが向沢へ渡り様がない。私と佐藤君はズボズボ雪に足をとられながら徒渉点探しの偵察をやる。雪解け水で流れも豊富なのか容易に渡れる所は見つからない。上の堰堤まで行ってみたがかえって危険なので引き返し少し、靴を濡らしても最短距離で行く方がいいとなった。スキーストックは対岸へ放り投げて身軽となり飛び石と藪を利用しての徒渉だった。佐藤君が先達となり立木とストックと飛び石を利用して対岸に飛び移る。何とか四人共靴下を濡らさずに徒渉成功。九・四〇駐車地点出発。偵察、徒渉などで小一時間を消費して女神尾根末端に全員集結。何せこの附近山中なれども海拔二七〇メートルしかないのです雪は少なく尾根上地肌が出ている所もある。一〇・三三、シールスキーで尾根にとりつく。木の根、岩コブなどを捲きながら雪を縫って登り続ける。天気は曇りでも視界は良く結構なコンディションである。一一・〇五、急登が息つきタルミの広ツパで休憩。薄日がさして気分が良い。中島君が一拍子遅れて登ってくる。ここから見る真昼岳は正面の南に開口した大倉沢の凄まじい懸崖となり、雪壁は大きくクレバスを散らし下部に滝の奔騰を見る。これで一〇〇〇メートル峰かと疑いたくなる重厚な山体に暫く魂を奪われてしまった。女神岳に繋がる兎岳の尾根はなだらかな優しい稜線が続き既に土、草が露出した所もある。真昼岳の威厳と対照的に優美な円弧に包まれた女神山



はお似合いの一对の御神体にも思われる。

一二…一〇、昼食休憩。赤飯のおにぎりを食べる。時々スキーを脱いでツボ足でクライムする箇所も何度かあった。一三…一五、P八〇二、地図上では大した登り下りでもないようなのだが鞍部への下りと登り返しがしんどかった。休憩の際ハーモニカを吹いて何曲か山の風に流してやった。一四…一五、女神山をよく展望できる所で一息つく。頂上の丸い女神山はすぐそばに接近してきた。女神の山頂部に女神尾根がドンと突き刺さったような感じで、接続部は沼でもあるのかと思うような凹陷地形の平が広がっている。尾根の先端の高みから引き返しながらい沼状を迂回し山頂を目指す、直登は困難な傾斜で途中より左手にルートを変えながら女神山北稜線の肩へ出てザックをデポし、一五…四〇である。日も傾き寒さが日陰から湧いて来た。スキーもデポしてストック両手に頂上を目指す。一〇分程で一〇〇坪位の頂上に達した。ここで秋山君は一六時の気象情報をキャッチすると言う。山頂雪田の西端に立ち女神の瞳たる山上湖を俯瞰すると白い原のような湖が一つ、一五〇メートル程の高差で存在していた。スキーを履き広々とした鞍部へシユプーを描きつつ向かい岸に着く。

P八六八はブナ林の台地状、その西端に風除けの雪庇の壁がありその下の窪にテントを設営。間もなく秋山君も到着。絶好の泊り場に恵まれた。今日の道程は約四キロメートルの女神尾根を約七時間かけて登った事になる。今夜は四人の泊り客。ザックは外部にテント内は必需品のみとし全員テントに入る。一泊のみで下山する中島君が今夜の食事当番である。御飯に卵、味噌汁、酒などで夕食。計画書にハーモニカと書いておいたら佐藤君が一挺持参した。俺のより楽器もいいし吹奏もうまい。スバルなど合奏した。山でハーモニカは初めての試みだが軽い装備なのでお奨めできる。山に来て何が嬉しいかって、いっぱい寝れること。前夜は殆ど眠っていない状態でクタクタに疲労しているとシユラフに入るのが何とも嬉しい。それから本音なのだが、友達は次々とイビキをかき始め前後に

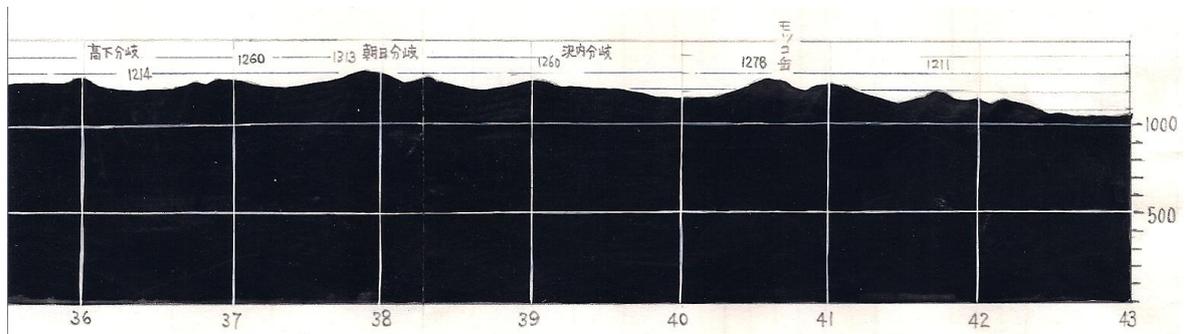


取り残されて残念、なかなか寝付けぬ……遅れをとったか。

三月一九日

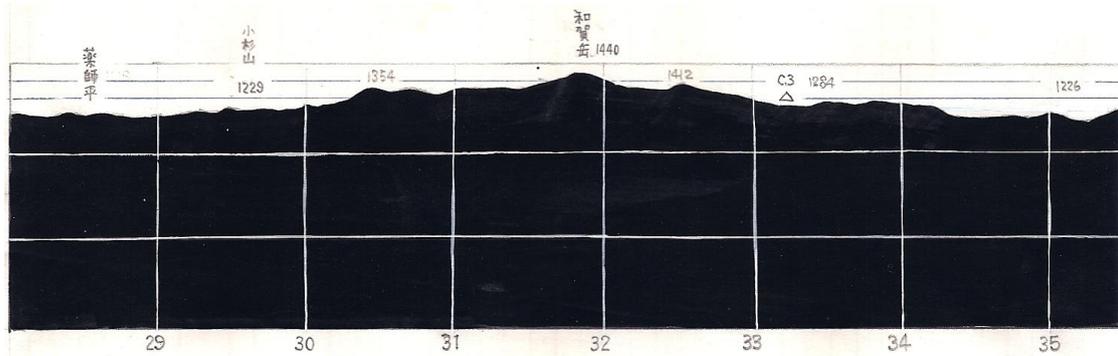
四・〇〇、アラムがなり全員起床。外に出てみると星空が広がり、冬のオリオン座が西に傾いて見られる。ラーメンの朝食。六・二〇、テント撤収出発。晴れていて気分がよい。高低のおだやかなこの尾根は能率が高くたちまち兎平の標識柱に達する。晴をよるこんでいたら曇ってきて小雪がちらつき始める。八・一〇、真昼岳直下、夏径分岐で一息入る。雪は締まりアイスバーンの所が多い。真昼岳の登りは急峻でシルスキーは無理となりトラージンとなるが、キックステップも効かぬ程堅雪となっている。そこでザックをデポしピッケルで足場をカットする事にした。充分な深さのステップを切り安全な登攀が出来た。ヒョイと頂上を見ると「あつ、牛がいる」と思った程大きな羚羊がじつとこちらを見ている。皆が見ているうちに、悠々と大きな姿は山の陰に消えていった。ダイナミックな真昼岳の登攀が細長い稜頂をたどる。中島君が下山路として、往路か、西稜か、峰越林道かを少し迷っていたが、彼と一緒に西稜方面を偵察し凍結がそれほどないと判断しつつ類の灌木が雪面上あちこちに現れている西稜を下山していった。ここまでのサポート行動本当に有り難う。交信時間を一時と約束。

広い雪庇上を北へ三〇〇メートルスキーイングして、一〇六〇メートルの頂上に着く。ここには山頂標及び真昼三輪神社の三メートル四方程の浪板鉄板の小屋があり、その前で休憩。風が寒く曇天であるが、グレープフルーツを三分して皆で食べる。神社を拝みたくて凍ったシリンダー錠前を石でコンコン叩き開錠し、足下の雪を取り除いて扉を開けることができた。お許しを乞うて中に入れば、室内は吹き込み雪もなく立派な神社であった。清酒が二本、カップ酒も一本、沢桜とか？地酒なのか一升は手つかず他の一升は八分目入っていた。泊れる程のスペースはなく、雨宿り避難なら数人は入れる程度であろう。



九〇〇、真昼岳頂上を出発。視界は余りすぐれず遠くまでは見通せない。しかし稜線の緩斜面をスキーで走るのも悪くない。佐藤、秋山君は、今や技術的にも、体力的にも非常に最良のコンディションにあるので私はなにもする必要がない。彼らはとても息の合う仲間なのであるのに関わらず、あと一週間もすると仲間を解消することになるのである。秋山君は大学を卒業し、大阪に就職するために故郷の岡山県に帰らねばならぬのだ。この前の例会の二次会はいさ八で秋山、野寄両君の惜別会をやったばかりだった。そしてこのビックな山行が仙台Y M C A山岳会の最後の山行となるのだ。佐藤君は優秀なパートナーを失うことを心の中で淋しく思っているのだ、気は優しくて力持ち、慎しやかで思いやりがあり本当に珍しい現代青年である。年の差は驚くほどあるのだが仲間だし、友達だ。本来ならば単独行と覚悟していたこの大縦走なれど、三人の青年に支援してもらいなんたる贅沢な山行なのだろうと山行中ずっと思い続けた。佐藤君はスキー名人だからかなりの急な雪底でも平気で滑り降りる。めったにスキーを脱がないから能率が良くどんどん先についてしまい遙か先で休んでいる。私と秋山君はスキーに関して苦手だから、危険を感じる。とスキーを脱いでトラージェンシツボ足でドブドブぬかりながら後を追うのでスキー着脱ヤツボ足で能率はかなり低下する。スキー巧者どうしでなら二倍の早さで縦走も可能なようだ。

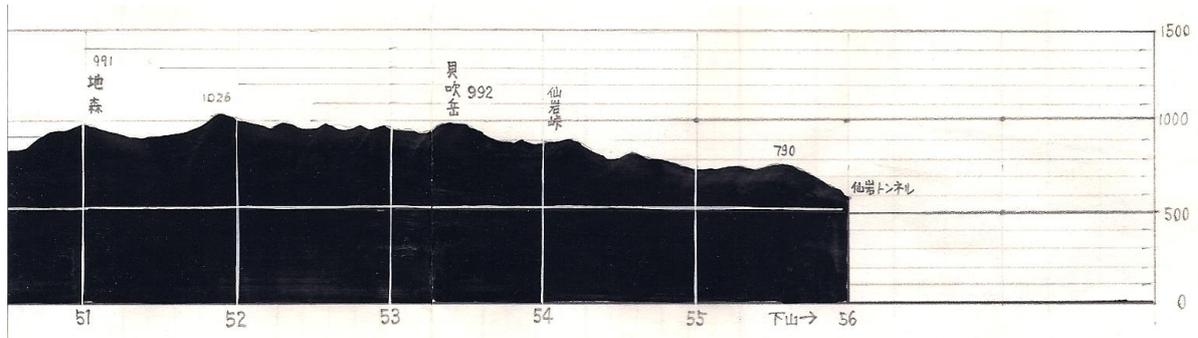
さて、真昼岳をガスに巻かれながら細尾根をたどりP一〇〇六、北真昼岳を通過。トツプ佐藤君がたどる方向に疑念を抱きながらも追っていくと、彼が立ち止まって地図を見ている。今出さんコンパスを見せてくれというので、コンパスを出す。二人のコンパスは南を指した。こりや反対方向である。南北に尾根が張り出し立派の雪庇がついていて、視界も悪いからルートを誤ったのである。すぐ五〇メートル位引き返して南北尾根の中間の痩せ尾根に進路を定めて下っていく。痩せていて、クレバスも多く時々西斜面に逃れて藪こぎをする。トラージェンが藪に引っかかり、また斜面にスキーを持って行かれて進行は楽じ



やない。一一〇〇、真昼岳を下って峰越林道の手前のユルで一本立てて、中島君と交信を行う、五七〇メートル地点まで下山したとのこと。一応安全圏に達したようだし、後は交通事故に注意して帰仙してくれよ。

一二・一〇、峰越林道。標柱が二、三本あり夏は車が行き交うのだろう。そしてここから真昼岳に往復登山する人もいるのだろう。頂上まで三キロメートル強だが、七つほどの山を登ったり降りたりして楽じゃなさそう。縦走の南面は雪の堅さもやわらいだが、北面は依然として凍結の斜面が多い。峰越林道から五〇メートル程登り、次いで二〇〇メートル近い下りをトラージンして行くが急な斜面で、佐藤君は先に降りて秋山君が続く。彼のキックステップをたどって私も下って行く。秋山君は巨人だからステップも長い。その歩幅に合わせるには努力がいる。スキーを足下に流した後から人間がついて行くが、堅いステップが崩れた瞬間、体もスキーも数メートルの滑落。立ち上がった時、不覚にも手首に巻いたトラージンの紐が放たれてスキーは勢いよく凍結バーンを滑り落ち視界から消えた。入山二日目にしてスキーを失い呆然となり、目まぐるしく今後の対策を模索している。秋山君が大事をトップの佐藤君に大声で告げている。しかし次に「止まった、止まった！」とこっちへ叫んでいる。落ちた距離は数一〇メートル、この急斜面でよくぞ止まってくれたものだ。凍結の少しワイドな斜面から右の痩せ尾根に寄り、皆の所に行く。沢状の急斜の途中にスキーがとどまり、そよ風でもまた動き出しそうな風情で静止していた。ストックをデポしてピッケル一挺の空身で支えキックステップで三〇メートル位づつ接近する。スキーまで横ざさり一五メートル、奇跡に感謝しつつ「今度は君を離さないよ」と抱きしめる。とんだアクシデントで肝を冷やしたが、以後トラージンは胴に巻いたバンドに繋いで行動する事と反省した。

P八二〇にて休憩。一四・二〇なり。これより五つばかり小山を越えて九五〇メートルの鹿子ノ山西峰に着く。風鞍が目標だったが日も傾き夏径峠が精一杯といったところだ。

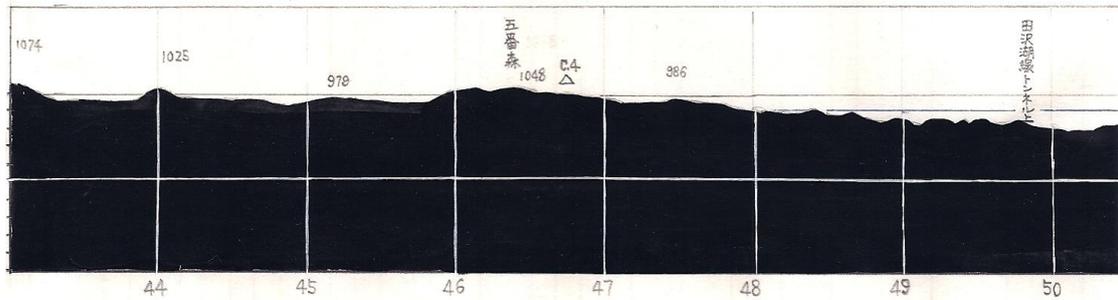


夏径峠付近にC2を建設する。すっかり曇りポツポツと雨が来た。その中でテント場の雪踏み設営、防風ブロック壁の製造も行った。ブナ林のほぼ平らな好適地に青いエスパースの城ができあがった。

三月二〇日

昨夜の雨は雪に変わって一五センチ程積もったようだ。これでアイスバーンから少し開放されるか、その反面雪庇が厚化粧しクレパスに墜落の危険もあるし吹き溜まりのラッセルもある。今朝も未明四時に起床出来た。今出製ペミカンとラーメンのドッキング、それに餅を二ヶづつ入れる。こんな御馳走でも食欲が半分だ。

七・四〇、天気が悪くてスタート遅れる。シルスキーにとって新雪が心地よい。緩いスロープ一滑りで夏径峠へでる。朽ちた標柱と雪上に出た枯草路形がおそらく村人が山仕事で通うだろう素朴な山径を伺わせる。天気は雪降りで見界は極めて悪い。割に広い尾根で高度差も緩やかに一〇〇メートル峰が四つ並んだ風鞍に高まりを続ける。一番奥の風鞍を九・〇〇に通過。視界はその後、時々最寄りの山腹を現わしてくれるので、ルートを決めるのに役立つ。九・四五、中の沢岳の直下で一本立てる。依然小雪状態。和賀の奇峰に甲山がある。岩だけの直立した姿はまことに超然として雄々しい。甲山の標識の前に立つ。雪が視界を隠し甲山の片鱗も望まれなかったのが残念である。割に広い尾根を地図、磁石で前進、一旦下りタルミがあつて大甲山への登りとなる。大甲の標識があり頂上確認、ここから晴れていけば見事な和賀本峯が目前に迫ってくるはずである。続いて薬師岳への尾根は約一キロメートルの痩せ尾根地帯、クレバスに新雪がコーティングされて落とし穴があちこちにある。トップはスキーを履いていてもクレバスに落ちる。佐藤君がクレバスに落ちて足をひねったらしく足を揉んでいるのを見た。視界なしのコンディションで薬師岳の登りは二〇〇メートルの高度差、その前半は緩いが後半は傾斜がきつくなる。トラীগ



ンに切り替え堅雪をキックステップで攀じ登る。雪はアイス状で雪を殆どとどめず。トップのステップも浅くツマ先の僅かなフリクションに頼る心細いクライム、しかも強風がフランスを失せよと横から吹っかけてくる。苦戦の後、傾斜が緩み頂上が近いと予感する。頂上には、アルミ製の標識と薬師堂の看板があるはずである。緩やかな頂上部を北進、やがて広々した頂上標識板の陰で一息いれる。薬師岳の北尾根は薬師平と呼ばれて平坦な地形が続く。泊まり場はここかもう少し先の小杉山（和賀岳の手前）にC3を建設しよう、と思ったが、この強風では天幕をはる場所があるのか心配である。

薬師岳（二二八メートル）の頂きを巻くように廻り込み薬師平へ出る。薬師平は大変な風で、二重山稜となっている中心部も峰越えの強風はすさまじい。無雪期の偵察ではいかにも二重山稜と見えた地形も、今見ると浅く広い凹地で無風地帯は存在しないかに見える。原を半ば横断する形で凹地に入り、山稜の切れる東面まで行ってみると、ちよいとした山の割れ目があり、そこだけが真空地となっており、ラッキーと皆で歓声を上げた。天は自ら助くるものを助くんだ。早速天幕を張り念のためブロックを造っては防風壁を築く。この強風下、このスポットだけが無風スポットとなっていて本当に信じがたい。しかし二メートル先はスッパと東面に切れ落ちる地形で油断はできない。我々三人は休憩の空間を賜り、冬装備を解いて心からくつろぐことができた。

夕食の時、東京都内の地下鉄の何ヶ所でガス中毒事件が発生し、七、八名の即死者が出て、数千人が病気になるというショッキングなニュースがあり、信じられない気持ちであった。何者かが一斉に朝の通勤ラッシュを狙って大量殺人を企てた、という報道で得体の知れない犯行に、山中深くひそんでいる我々にも戦慄が走った。一月一七日の阪神大震災は地震がないと信じられていた阪神地方を恐怖のどん底に落とし込んだばかりの未曾有の出来事であった。しかるに又また大凶の出現、日本人なのか、外国人なのか、同時多発の事件なので目撃者もいて早期解決するに違いない。円の急騰、円が一〇〇円割れして九



○円、更に八〇円に近づく・・・これもえらいこと、バブル崩壊後の不況も日本中深刻で、我が家に至るまで影響は及ぶのである。

三月二一日

五・〇〇、起床。どうやら視界も得られそうな気配である。唯、強風が荒れずさんでいて無風スポットも神通力を失って風洞となってしまう。その中を各自トイレを求め散開する。七・〇五、シールスキーで出発。約一〇〇メートルを一時間かかって小杉山に到着。真横からの西風に阻まれてペースは押さえ込まれてしまった。丈の低い雪面上の灌木は見事な霧氷が華となって美しい。和賀岳西峰とも言うべきP一三五四への尾根はさすがに本山の貫録、堂々たる広い雪庇でスキー用アイゼンの効きもよく快適に登って行く。視界も次第に広がり、和賀岳本峰も見えてくる。九・三〇、二つの前衛峰を乗り越え和賀岳頂上に到着、一四四〇メートルのやや広い頂上は強風の吹き曝しで身を隠す何ものもない。「アーン」と言う叫びでハッと振り向くと、芳樹君のメモ帳とボールペンが手元から引きちがれて矢のように飛んでいく。この瞬間、彼の貴重な記録は秋田県側に消えてしまった。休むいとまもなく行動開始し、三〇分歩いて風の弱いところを選び休息した。途中、P一四一二から尾根をはずし東面へずり落ちる所がある、視界がよくなりスムーズに主稜線を辿って行く。

和賀岳本峰より、四キロメートル高下岳分岐で点で一本立てる。一〇・五五である。やや風も鎮まったかに見えるが曇ってきて、一時ボタ雪が降ってきたりする。尾根も少し痩せて更に二キロメートル、朝日岳分岐P一三二三で休息。朝日岳の饅頭型を眺めているとつい往復して来たくなくなるが、一時間では無理だろう。北西に夏径のない処女峰羽後朝日岳、南に一三〇〇メートル峰を点々と五つ並べた高下岳、南西に最高峰和賀岳の秀峰、北東にはこれから越えていくモッコ岳の雄峰と展望が啓けてここは仲々の展望台である。一三・



和賀岳山頂

〇〇、頂上に土砂の露出したピーク沢尻岳に着く。見沢野に下山する径とモッコ岳への分岐点である。一四・〇〇、モッコ岳、風もずいぶん鎮まり景色を欲しいままに眺めつつ行動できる。

高度も下がり、樹林も尾根に迫ってきた。気温の上昇と風の鎮静と太陽の直射となり、樹林の霧氷が一斉に落下する珍しい現象を観察することができた。全山に轟く一斉落下のザーザーという音は無風静寂を突然破り三人の旅人を恐怖に陥れた。花火大会のフィナーレ「ナイアガラ」というのがあったが、樹林の霧氷が何十秒かの間にナイアガラの姿となつてきれいさっぱり楽華するのである。勿論今までなかったわけではないがこんな大規模ものは経験がない。霧氷落しの気温は何度なのだろうか。温度計を持っていたらよかったのに残念でならない。殆ど無風状態だったので風が影響したとは思えない。直射日光による気温の急上昇の作用で起こったものと考えられる。一六・〇〇、P一〇二五。雪が腐つてシールにくっつくのでパラフィンを時々塗りなでつける。秋山君はシールが粘着力を失い、ガムテープで辛うじてくっつけているのでトラヴァースの時など切れたりして性能が悪く遅れがちで苦労している。風収まり、陽は照り輝きまことに有り難い。

一六・五〇、五番森直下に至り、ここにC4を決意、今日は天気にも恵まれ一挙一七キロメートルの主峰越え、雪稜縦走に成功した。黒いブナの森に雪を固め防風壁を造る。C4建設中に一度雨が降ってきた。テントに逃げ込みホッと安堵した。夜空には星が輝き、ハローモニカの旋律が五番森に流れて行った。

三月二二日

三・三〇、起床。縦走最後の日なのに雨降りとなり、おまけに風も強い。出発は六・三五となった。湿雪が強風とともにたたきつけてくる。五番森の急登一〇〇メートル余りをてるが、ずいぶん時間がかかっている。行く程に視界も広くなり遙か彼方前方に赤い橋梁



のようなものが見えてきた。朝日岳・モッコ岳間の渓谷より流れ落ちる生保内川の谷の先、あれはJR田沢湖線か、国道四六号線か？直線距離三キロメートルかもうちよつと。やはり大滝沢橋と思われる。現在一時間で一キロメートルのペースで昨日の快進撃とは比較にならぬ遅さである。しかし天気も視界も良好となり、岩手山や真向かいの秋田駒も次第によく見えてきた。今日中の下山はほぼ間違いない。この付近小さい凸凹が沢山あつて八五〇メートル級が数個並ぶ。コブ郡を乗り越せばJR田沢湖線の五キロメートルに及ぶ仙岩トンネルの直上を通過する。この尾根の五〇〇メートルの地下がトンネルなのだ。

一旦七八〇メートルの鞍部におりたち、一五〇メートル余りの急登で地森（九九一メートル）に登る。折り返すようにいきなり曲がつて痩せ尾根となり、その対峙する山はと見れば、頂上に反射板一对を角のようにたてて、こちらからの尾根の接続は切り立った山のごとつ腹に吸い込まれていて、殆ど壁と言わんばかり。地森より三〇メートル程高い一〇二六メートルの小さいながら難攻不落の城砦を誇るかのようだ。連絡尾根も雪庇ザクザクで肝を冷やしつ、どうなることやら。いいエスケープも叶わぬ故、やるしきやないのだ。トラージェンしつソロソロりと進む。トップの佐藤君はキノコ状の雪の鞍馬に四つん這いで抱きつき、慎重に突破口を拓いて行く。傾斜は次第にきつくなり、トラージェンのスキーが藪にからんだり宙にブラ下がったりして醜く重いもの凄い抵抗となっている。高度を稼ぐ程こんどは強風も加勢してくる。山行後半のもつともスリリングな雪壁の突破も成功に終わり、一番最後に這い上がり皆を追いかけて行くと、真っ白い旋風に翻弄されて数秒身を伏せる。ここは「地森〇〇施設」と銘板が鉄塔に張つてあつた。地図上の地森と実際の地森は異なるのか？

更に北上、第二の反射板を有する貝吹岳に向かう。痩せ尾根を渡り歩くこと一・五キロメートルほど、貝吹岳は副峰を従えて峻しく、烈風は雪を巻き上げ、一瞬雪崩にでも巻き込まれた錯覚に陥るようなホワイトアウトを突き抜けて、副峰から本峰の反射板鉄塔にた



どり着く。長い長い五三キロメートルの歩行の後、到着した最後の頂上であった。一〇〇メートルに僅か七メートル余り低いこんもりと突き上げるこの山は、近々と聳える秋田駒の大展望を提供して偉観である。また、この山の直下を岩手秋田の大動脈四六号線の仙岩トンネルが貫通しているのだ。地中深くバスが、トラックが走り交わっているのかと思うと里心が甦ってくる。一息ついて一四・一五、仙岩峠までなだらかな雪の堤を数百メートル下って行く。雪上に峠の雪柱の標識があった。昔の南部藩、秋田藩の「お境塚」と言うことで、双方からの交易路があった所で、一・五メートルの石柱には「従是 西南 秋田領（これより西南は秋田領内）」とある筈で、頭の「従是」の二字だけが読めなく雪に没していた。また、この峠の二キロメートル余り北西方にある国見峠には「従是 北東 盛岡領」の石柱お経塚がある筈である。

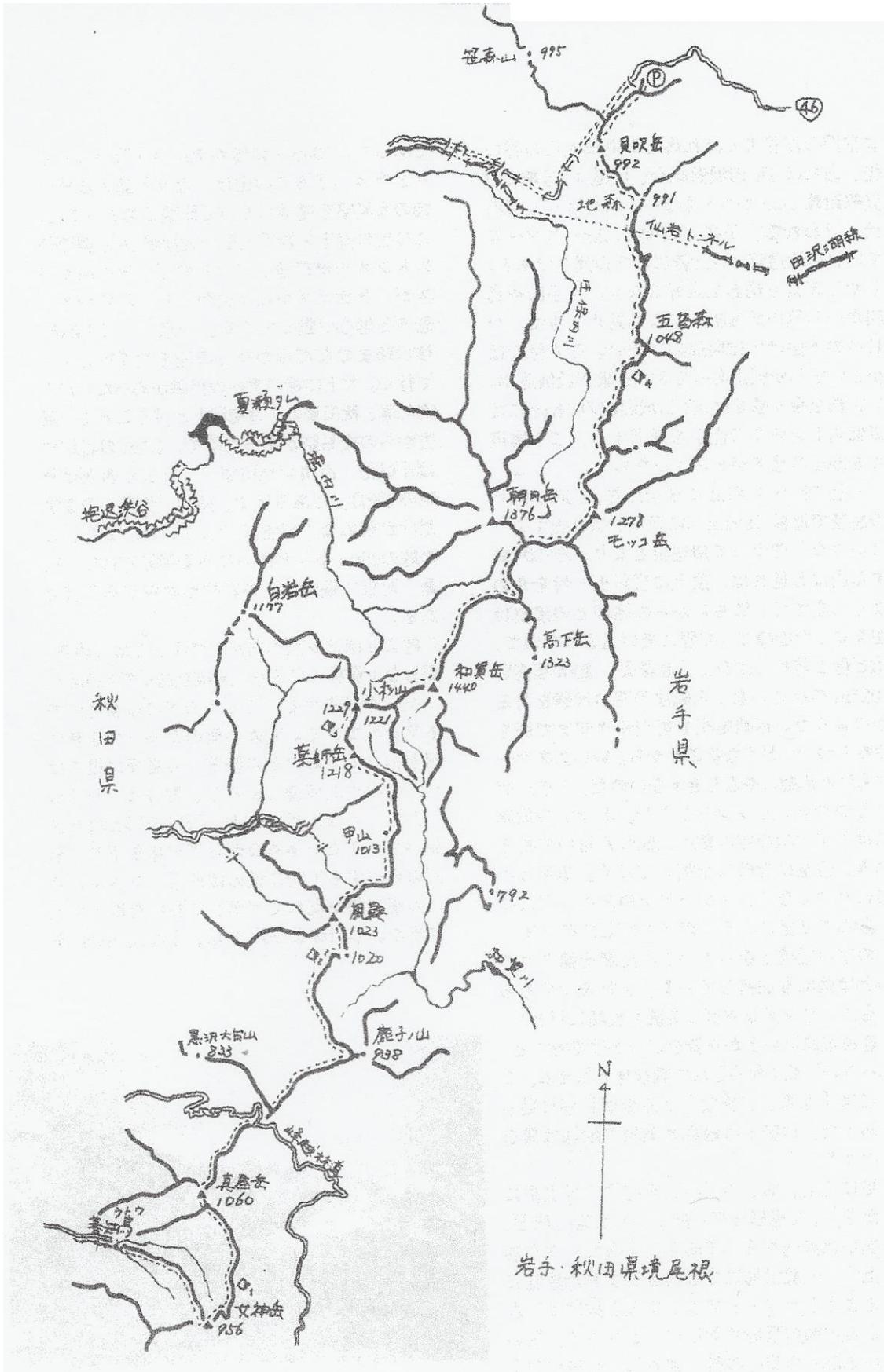
峠よりほぼ真東に向かって降下をはじめ。間もなく樹林帯に入り、尾根を辿って八二九メートルポイントを通過する。この雪の下には夏径がある筈なのである。向かい側のシヤープな瘦尾根が迫ってくる。その鞍部から夏径尾根をはずし尾根の北西麓を辿ると、雪のビッシリついたのどかな世界である。沢状地形となりクレバスに腰まで落ちながら雪の崖を下り、車両の音のする方向に進めば仙岩トンネル入り口構造物が現れてデポしておいた車両の上に出た。仙岩峠より約二キロメートル、高度差三〇〇メートルを下り、縦走五六キロメートルの終点に無事下山。一六・〇〇。バンザイ！周囲を一メートル以上の雪壁に囲まれて、駐車場は主を待つ車一台だけ。アスファルトの乾燥部分にザックをおろし、装備を解いて並べる。少し傾いた太陽が濡れた装備をちよつとの間、乾燥してくれる。トンネル横の電話ボックスから仙台の連絡本部へ下山の報告をする。

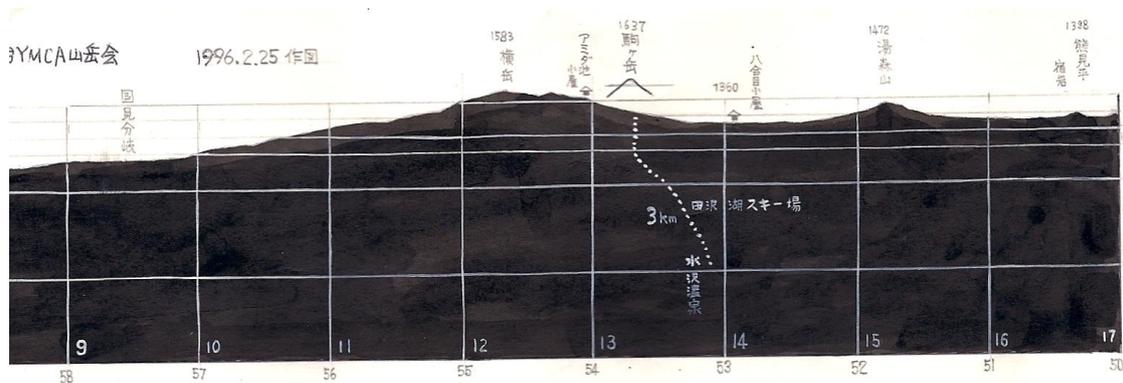
我々は消費したゴミもろとも全装備を車両に満載して四六号線を盛岡に向かう。途中ドライブインで久し振りの満足な食事をする事ができた。雪のない街並み、雪のない道路を珍しいものを感じながら、車の快い振動に身を任せて夢を実現させて今や我が家を目指



して帰途をたどる幸福感にひたっていった。県境を遡ること仙台より直線二〇〇キロメートル。蔵王、栗駒、焼石、女神、真昼山地、仙岩峠と続いて県境北上はなおも続く。よき友、よき山、そして、よき夢。

(やまびと季報一〇号掲載)  
この稿の写真は佐藤芳樹氏撮影





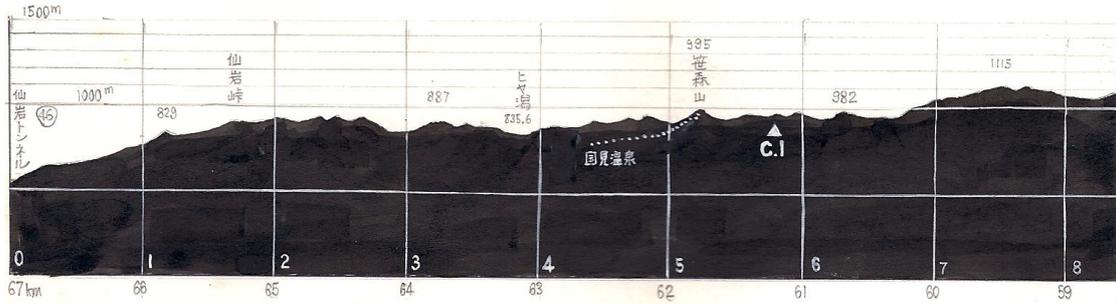
## 仙岩峠から八幡平まで

平成八年 三月二〇日～二六日、 四月二六日～二七日  
 今出隆康(単独)

再び県境を北に目指す・・・

去年は三月、真昼山地の県境縦走を敢行、パートナー佐藤芳樹君、中島健太郎君、秋山君の強力なサポートを受けノンストップ四泊五日間で女神山と和賀岳と仙岩峠六五キロメートルは計画初年で成功してしまった。しまったとは言いつ過ぎだが一発で決つちやう、単独で何度か挑戦して獲得できる困難性がかくもあつてなく消えてしまうものかと思えてしまう。やはり単独の挑戦は精神的に体力的にかなりの制約を受けるし、行動自体が自衛本能が働いて控え目となるのは止むを得ない。例えば独りでのラッセル、難場の突破(ジッヘル無し)無視界時のワンデリングなど多々デメリットが発生する。誰のサポートも受けずに縦走したい。サポートを受ければ成功率は飛躍的に高まるのも確かなら、ノンサポートにはそれだけに価値があるのも事実なのだ。だから色々考え仙台・秋田線都市間高速バスを利用して仙岩トンネル前で降りてもらえたらと真剣に思った。仙台広瀬通り深夜二四時発車、高速道路経由、仙岩トンネル未明三時とみてバス会社にお問い合わせしたが態よく断られてしまった。秋田まで一回も停まらないと言うのだ。赤信号でもつつ走るのが高速バスであるらしい。次いで車を自分で運転し仙岩トンネルに駐車、縦走して八幡平に下山したら盛岡にバスで出て、田沢湖JRに乗替え赤湊駅から国道を八キロメートル程歩くとか、雫石駅からタクシーでトンネル駐車地点に戻るとか時刻表で調べておいたがいずれも無駄が多く妙案とは言いがたい。早朝山にとりつくには、やはりマイカーで入山が一番、公共機関では昼近い時間帯となってしまうのだった。

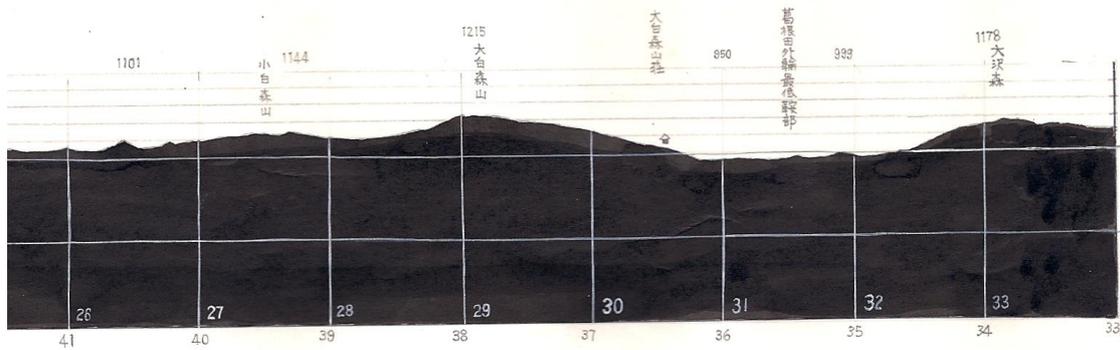
積雪期県境縦走 仙岩峠・八幡平登山計画 距離・高度図



三月二〇日 晴れ

未明三・〇〇、三女たかねの運転による自家用車は出発した。高速道路には入らず、ひたすら四号線をたどる。交通量は少なく長距離トラックが高速道路なみの猛烈なスピードで運行してとても怖いが程々のスピードで闇の街道を走る。途中運転交替などもしながら古川・築館・一の関と駒を進める。路上は乾燥して快調に走っていたが水沢市付近に来たら雪が降り出し路面凍結圏に入ってしまった。トラックが停車して前方が渋滞、前方のトラックは側道に入りＵターンして戻ってくる。訝って車を出してテカテカのアイスバーンを警戒しながら様子を見に行くとトラックの運転手が前方に大型トレーラーが道路を塞いでいるとのこと。なる程。パトカーも来ていて何とか解決しそうな工合だ。この先益々凍結が厳しくなるのかも知れず気分も重くなる。さればとてチェーンを着ける程でもないので慎重に運転を続けるうち路面も乾燥圏となり石鳥谷杜氏の里にて休憩。ようやく明けそめた盛岡を通過し46号線に入り目指す山々が見えてきたが山裾半分が見えているだけ・・・霏石スキー場の山腹の幾何学模様など奇異なものに見える。仙岩トンネルに近づくとさすが道路の両側に残雪が増え路面の凍結となり再び緊張の運転となった。ノンチェインでトンネル入口左側の駐車場に車を停める。雪の壁は去年真昼山縦走の時と同じ位の約一・五メートルあった。全オーバー靴ワカンなど装着。すっかり明けて太陽も時々現れる。

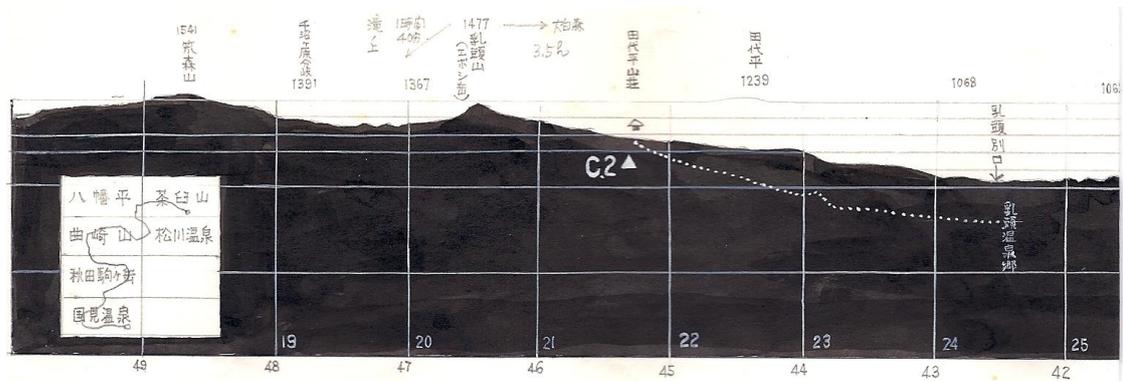
六・五〇、準備完了。いいスタートだ。ストック一本を手にザックを背負って雪壁の上にする。新雪が若干、その下は雪が締っている。たかねに労をねぎらい気をつけて帰るようにと言って別れる。一週間山で孤独になる父親をどんな気持で見送っているのか。あとは振り返ることなくひたすら山毛櫛の雪山を踏んで行くだけだ。たまに赤布が見える。ここから登降する人もいとみえる。黒い樹影と白い斜面はどんどん娑婆の光と音から遠ざ



けられ何やら心細い未練と俗界のしがらみからの脱出という俺だけの世界を独占するのだとの自負、そんな混沌の一刻を持つのだった。グループ登山では会話があるけれども自問自答はなかなかないものだ。そんなことで心の中には暴れん坊の私と慎重居士の私が常に議論し葛藤を続けることになる。

今日のノルマはどこまでであろうか。計画上は入山の困難性、例えば自宅へ仙岩トンネル間二二〇キロメートルが積雪路面の場合などを考慮して初日五キロメートルか六キロメートルの地点に泊地と決めていたが、順調なコンディションに恵まれ行けるだけ稼いでおくのが賢明と思った。又、真昼山地縦走の時は仙岩峠付近の小峰群は痩せていて意外に手強かったので県境に上がってから苦勞も予想しておかねばならなかった。一年前下ってきた尾根なので時々地図は開いたが土地カンが働いて難なく八二九のトンガリに登りここで一本立てる。五〇分の行動であった。秋田駒は雲の中、風は強い西風でいつ姿を見せるやら・・しかし、その山足は日が照っている。南望すれば反射板一対をツノのように生やした貝吹岳、その先に地森がはつきりと視認できる。ここより一登りで県境尾根に達するのだが標高九〇〇メートル、地図上に仙岩峠とある地点である。去年ここで是從西南秋田領の石碑をみたが上の二字だけ出ていた。今年は完全に雪面下で僅かに穴に黒御影の四角が見えやはり多雪を証明しているようだった。この直下四〇〇メートルの地底を仙岩トンネルが走っているのである。

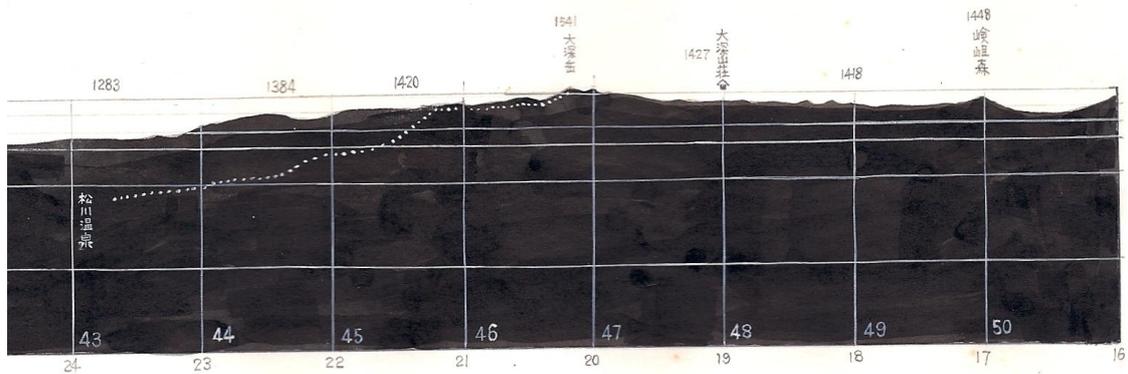
尾根は北西から真西へと湾曲し八八七Pへ約二キロメートル、ヤセ尾根だが雪庇はしっかりとっていて時々藪に逃げるくらいで推移してゆく。真白の平に小屋の屋根が二棟見えだし八三五メートルの峠が近づく。ここにはヒヤ湯と呼ばれる池があり小屋とトイレらしい建物が屋根だけ雪上に現れて静まっている。そして巨大な石碑があり下の半分を雪中の洞に沈めて立っている。曰く「国道仙岩峠貫通記念 建設大臣 河野一郎」とある。仙岩トンネル開通以前はここが国道として盛岡秋田の大動脈だったのか。この五メートルはある



巨大な石碑はもう廃道となった昔の往還を物語る記念物となってしまった。よく周囲を眺めると白い平地はヒヤ漚か・・・そして県境を越える旧国道の路形が秋田側へ・・・そして池を巡って岩手側へと空想させられる。国見温泉が遙か二〇〇〇メートル先にあり、白い斜面をバックに十棟余りかたまつて屋根をひしめかせる風景が眺められる。晴れてはいるが風が猛烈でメモをとるも給食するもママならない。巨大な記念碑を撮ってから九〇〇、再び雪を踏んで行く。

雪庇崩壊のクレバスを逃れて藪こぎも度々となり国見峠、笹森山と苦心しながら歩を進める。笹森山付近では小ピークの連続で次第に一〇〇〇メートルルコンターにと階段状に標高が上っていく。横尾根と呼ばれる駒ヶ岳外輪山は真白で僅かに岳樺の点在をみる。隠れていた駒ヶ岳女岳が時々早雲の間から姿を見せて翳ったり輝いたりをくりかえすようになってきた。瞬時々々の変化はめまぐるしく又、躍動的でその素晴らしきは目を離せない。風と闘いながら何度もシャッターを切る。そのうちにも雪雲がやってきて急に俄か雪が降ってきたりしながら樹林限界は過ぎて行く。一一・三〇、真西から北に、そして東にと逆コの字に大曲りする一一五P大曲点通過、いよいよ駒の外輪横尾根の末端にとりつく。

外輪の内面は広大な傾斜の凹陷地で大グレンデ状を呈している。雪面は氷化してカリンカリンとなって登る程にワカンの爪が浅くなって能率がよくなって行く。ただし風当たりはますます強く一歩一歩が吹飛ばされないように耐風姿勢で。ペースは下降線をたどることになる。あの早雲の去来を素晴らしいなどと眺めていたがそのジェットストリームの中に身を置いているのを実感する。大焼砂から横岳への区間は更に激しく一歩足を出すのにじっと待機して風の呼吸を読みながらの匍匐前進となった。遂に横岳へ登頂、男女岳、男岳、女岳、小岳、横岳と五つの山がすっかり晴れ直り目前に拡がっている。横岳一五八三メートルから諸峰を飽きる程眺めて後、眼下のアミダ池小屋めがけて降りることにする。しかし、降りはやや風が弱まったとはいえアイスバーンでワカンの爪では喰い込みがない。

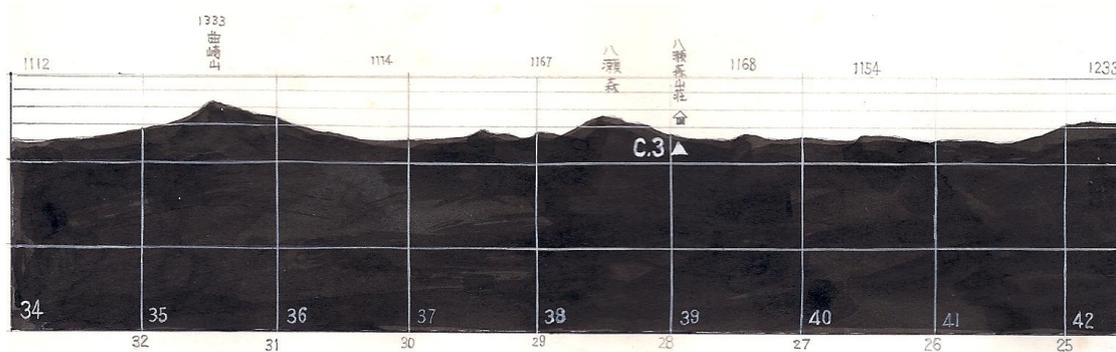


滑落したくないので氷面をゆっくりゆっくり慎重に下る。アイスバンのいくらか軟そうな所を狙って微妙な色の違いの斑紋を拾い拾い繋いで行くが時間のかかる作業であった。時々突風でバランスを崩しそうになるのをこらえこらえて何とか無事にアマダ池小屋に着いた。一四二〇であった。日も傾きはじめこの小屋に泊まれると思うと心はずんだ。一階部は雪に没し二階の窓から入れる筈である。梯子に登り窓を開けようとしたがビクともしない。ロックしてあるわけでもないのに動かない。窓全体が蟻付けされたように氷が詰まっていて無理と判りガツカリしたが今日は予定を大きく上廻る前進ができてその点では大いに気をよくした。最高峰の男女岳では目の前に円頂を見せて本縦走の最高点ではあるがアイゼンを持たぬ現況では断念せざるを得ず更にテント場を求めて県境をたどることにする。一旦県境方向に戻り横岳・湯森山の鞍部二三六〇メートル地点に下って行く。コルの若干手前で積雪の挟れた凹陷地形を発見、天の恵みとばかり喜んでテント場固めを施しようやく安住の地を得られてホッとす。八幡平大縦走の第一夜である。独りでは広すぎるテント内ではあるが火器が熱い夕食を提供し一杯の酒が心身をくつろがせてくれてここは皆だ！天国だ！とばかり大音声で唄うのだった。

三月二一日

天気はよさそうだ。テントの窓から早池峰山や岩手山が神々しく望遠されて心がはやる。モルゲンロートだ。

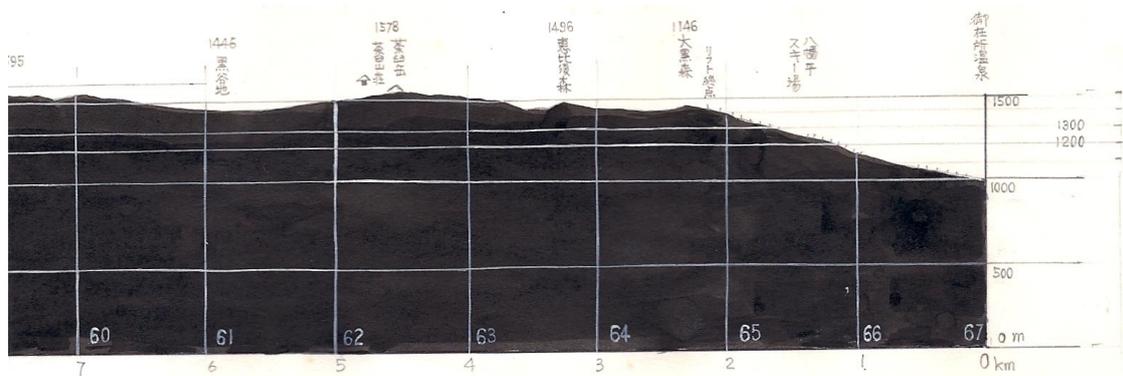
六三〇、出発。風強く雪面はアイスバーンで一面の氷原となっている。アイゼンが欲しい・・・だが重量制限でアイゼンは載めなかったのだ。湯森山まで一・三キロメートルを四五分で七一一五登頂した。乳頭山やらどれが県境とも知れぬ外輪の山の畝々、そして甲状の山々の彼方に八幡平の平頂が横臥するように伸びている。優しい甲状の山の起伏、湯森山、熊見平そしてこの辺では一番の一五四一メートルある筈森山へと小さな樹氷の原



を緩やかに登る。ラッセルない分とてもよいペースで心地よい。広い広い八幡平を独占して闊歩する誠に贅沢な山旅に酔う心地・・・これぞ春山縦走の醍醐味ではあるまいか。

一〇・三〇、乳頭山に登頂。山頂の岩石の上にとっかかと座り高度感を楽しむ。来し方を凝視すれど堅雪の為白雪上のトレールは見えず、ここかしこ空想のトレールを描いてみたりする。雪庇を破ったりして登るには登ったが下降は怖いアイスバーンである。ワカンはアルミパイプ製で鉄のシャープな爪ではあるがアイゼンのように氷に喰い込む性能はなく蹴込んでも効果はない。余り気張るとワカンを破損しかねないのだ。怖い一歩一歩の下りの連続、横歩きしたり軟そうな雪の部分や僅かな藪を拾ったりして少しづつ高度を下げて行く。アイゼン持参の山行では使わずじまいが多いのに持って来ないと毎日欲しくなる・・・アイゼンは何グラムだったっけ？

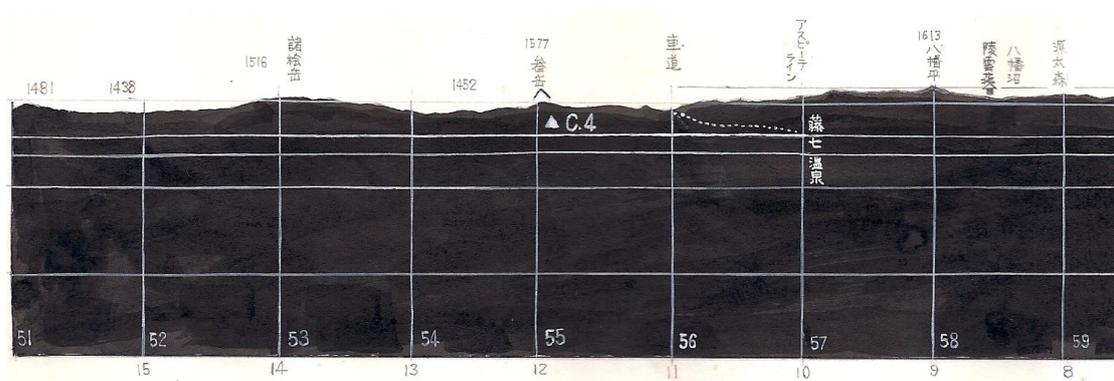
もうこの辺から田代平山荘がはっきり見えていてそれを目掛けて進んで行く。高度差は乳頭山よりちょうど二〇〇メートルの下りでアイスバーンは終わり今度は豹変して俄かに軟雪帯にはまり込んで行く。一三〇〇メートルからアオモリトドマツの樹林もさらにズブズのラッセルが始まった。田代山荘はまだ新築の気分のある立派な小屋で、泊まりたい気持ち誘われるが残念ながら今は先を急ぐ必要があった。今日の天気はまだ持っていて結構なのだが明日は雨の予想がある。今一時まで半日行動できるのだから大白森山荘まで陣を進めたいところである。スキーを履いた山男が独り山小屋まで登ってきた・・・一週間の中で人間にあったのは、たった一人だけだった。盛岡の人でこの下の乳頭温泉孫六湯から来たとのこと、直線距離で二・五キロメートル程あろうか。お互いに小屋の前で昼食を食べる。彼はガスバーナーでラーメンを煮ている。小屋は雪面から二メートル位の雪穴の中に没していて、降りるも戻るもしんどいので小屋の扉に手を触れることもなく、別れを告げひと足早く出発として広々とならかな田代平をラッセルして行く。標高も下がり深雪地帯と正午の最高気温時と重なって二〇センチのぬかり具合で先程のアイスバ



ーの緊張と全く反対の現象に、とまどいを感じる。所々の黒い針葉樹と雪田の平で方向を失いそうだ。地図磁石を常に照合しないと安心して進めない。小屋から一キロメートル雪原を横断しそれより一〇〇メートルを下り県境をたどらねばならぬが、急斜面は樹林帯となりうまく県境をたどれるか心配である。これだけ天気よく視界に恵まれていても単独であることや極めて緩慢な地帯であること、樹林地帯に入り先が見えなくなってきた、などで仲々緊張を要する行動となってきた。夏昼も存在する尾根なのでたまにツアー標識の円盤が岳樺の木に打ち付けてあったりして少し確認ができてほっとしたりする。上半分がオレンジ色、下半分が黄色で182などとナンバーがあり下に生保内営林署などと書いてある。

一三〇〇、山荘から三キロメートル程歩いて乳頭温泉蟹場温泉への標識と出くわした。一五センチのラッセルと暑さによるワツパの雪粘りでフットワークのペースは鈍化している。密林と広尾根でルートが不明になるのもペースを鈍らせる一因か。時たまあのツアー標識に出合うが、ルートファイディングも難しくザックをデポして空身で偵察するという行動の連続となってきた。着雪ワツパの足枷、それにあちこち靴ズレで足が痛む。天気さえ良けりや、視界さえ良けりやあとは、何もおねだり致しませんと神様に申しておきながら、暑いのが痛むの方向が判らないのと今さら苦情とは怪しからむ見ではある。

一三三〇、蟹場分岐より五〇〇メートル地点で一本立てる。天気はとてもよく空を見上げると巻雲が湧いて来ているなと思う程度だ。この先一〇六三P、一〇六〇P、一一〇一Pなど小ピークが三ツ連続している小白森一一四四メートルへと連続する二〇〇〇メートルのアプローチ、メモ帖にはこのあと大森山荘まで記録がない。この間三時間半の空白。途中一一〇一P通過後樹林帯の間から何か建造物のようなものがみえて近づいて行くと赤みを帯びた奇岩が気味悪く鎮座しているのだった。航空写真には写らない程度の突起ではあるうが地形図に奇岩と△印を記入しておく。程なく小白森の雪原を遮断して一旦



下ってそれより一〇〇メートル高度を稼いで大白森へ出る。大白森は陽も傾き太陽の輻射熱は既に失せ寒々と夕辺が湧きはじめていた。大白森は巨大な鏡餅である。行けども行けども白い餅の上にいるような気分なのだ。それでも餅の縁にたどりつき凄いいい屋根となつてブナの原生林へ落ち込んで行く。いつの間にか空は曇りパラパラと雨が降ってくる。大白森山荘へはこの広いブナの密林をどうやって捜せるのだろうか。ブナの巨木を縫いなから殆ど小屋は諦めかけてテント場を捜しながらラッセルを続けて行った。ここでもいかという場所にザックをデポし空身で少し先まで偵察に行くことにする。二〇〇メートル程進んでみて、一〇〇メートル先に何やら小屋のようなものを発見する。幻想か？森の中はもう暗くなりちようど幻想の起こる時分でもある。更に五〇メートル進み、殆ど奇跡とも思う山荘の発見で小躍りして喜んだ。ただし、入れるかどうか小屋の前に立ち二階の南側の窓に手をかける。一階部分は雪に没して二階の窓が一階部分となつて楽に出入りできる位置である。窓はNO PROBLEM!であった。イイゾー。時計の一七:〇〇を確認しながらすぐにラッセルを辿ってデポまで登り直しをする。

小屋は三間×三間。中央部に階を繋ぐ一間四方の吹き抜けがあり梯子で結ばれている。汚い布団や毛布が高く積み上げられているが気持ちが悪。先程の吹き込み雪もなく湿っぽい程でもないので使えそう。ベニヤ板の五ミリ厚が何枚かあるので風除の為居住区を侵入窓付近ときめ一坪分をベニヤ板で囲む。銀マットを敷き靴ズレの足をライケルブーツから引き出す。まあまあよくここまで頑張ったなと素足に励ましの言葉をかける。一人でいるとよく独り言をやっている自分に気がつく。森閑とした小屋に夕闇が溢れ、それに入れ代わりロソクの黄金色で小屋の中が染められる。憩いのひととき熱い夕食が幸福感を導いてくれるようだ。夕食も終わる頃、何か動き廻る気配がする。さてはこの小屋何か出るなとソーナーを張巡ぐらせて身構える。何じやると気味悪がっていると遂に出た。ベニヤ囲いの隙間から小鼠が二、三匹入って来て大胆にも食卓を荒らし始める。この野郎よく

も脅かしやがって傍人無若、貴重な食料を目の前で略奪するとは！靴下で叩きつけるが素走しこく命中しない。ベニヤ壁の隙間をなくそうと工作するが垂直にするとベニヤ板が倒れるのでどうしても隙間ができ再び小さな侵入者が大きい侵入者を攻めてくる。まあ彼らも飢えていて冬眠中に久しぶり食事の匂いで興奮しているのだからと同情もし仲間意識も生まれてくる。よし、ヨシシそんなら和睦しよう。ピーナッツを一〇粒づつやるぞ。黙っているとな膝の下までチョロチョロして体まで齧られそうだ。幽霊が出るより鼠の方がマシではあるがこう喧いと外にテントを張った方が安眠できるのではないかとちよつぱり後悔の念も湧く。ライトを点けて吹き抜けを梯子で下りて偵察もしてみる。しかし陰気ではなれぬ。気温もさほど寒くないので室内にテントを張らずに就寝する。食糧は天井から吊り下げチュー害に備える。鼠への宣撫作戦にビスケットなどを与えておく。仲々寝つかれぬ夜だったが身体はどこも齧られなかった。いつしか大白森山荘の第一夜は雨の音と共に更けていった。

三月二二日

随分の大雨となった。たつぷり積もった屋根の雪が雨のため軟化し直撃落雷のような轟音をたて何回かに落下した。音のみならず家屋全体が振動して驚天させられた。NHK盛岡を聴いていると岩手県は全県雨、東北自動車道は八〇キロに規制、仙岩トンネルは凍結、強風ナダレに注意報も出て九〇〜一〇〇パーセントの雨と報じている。所によつては雪、盛岡は平均気温より五度高いとか。雨音が強くなってくる。今日は完全に停滞だ。テントだったらどうだろう。強い雨だとゴアを通すか、雪の上も水が流れるか、出入り口のハッチからも浸水してくるか、とにかくテント内の温度が上昇しシュラフも衣類も装備全体水気を帯びて使用不能に陥ってくるに違いない。鼠のいるこの小屋も大雨にあえば誠に心強

い岩であり鼠にも小屋にも感謝感激あめあられである。簡単な朝食をとり沈殿用の文庫本をとり出し寝袋のまま座り読書タイムだ。「NTTふれあいトーク賞一〇〇選」と言う文庫本だ。八〇才のお婆さん、六才の男の子、女盛りの主婦、色んな職業の人、学生などの公募でちよつとした機智、出合いや別れの感激、日常のどこにでもありそうな出来事、ペットの話など他愛もないが、何か心暖まるエッセイがいっぱい詰まっている。家の中に転がっていた娘の読み古しなのか、ひよいと拾ってザックに忍ばせて来たヤツだ。重量制限厳しき中、よくぞここまでついて来たものよ。文庫本に飽きると古新聞を読み始める。新聞紙も重要な山装備である。小屋備品の大学ノートは始まったばかりの記録帖。平成七年六月とあり七月七日から一〇月一四日まで一二名が記載している。大白森湿原を讚える言葉が沢山書いてある。そんなにいい風景なのか、夏期にも訪ね来る誘惑を覚える。そして私も退屈しのぎにノートにメッセージを落書きする。

一二時と一六時にNHK第二放送の気象通報をキャッチし天気図を描いた。これはえらい荒天に遭遇したものだ。前日の二日間の好天を覆えす第一級の悪天候とのコントラストの対比！

三月二三日

暴風雪。昨日大雨をもたらした一〇〇四HPの三つ玉低気圧は北海道東方沖に去ったのだが大陸には一〇四HPの高気圧があり西高東低の第一級の冬型となった。三つ玉低気圧は一つに纏り九八二HPの大玉となりその気圧の傾きは六〇HPとなり北陸北日本は顕著な縦縞模様となり風雪が激しい。大白森山荘は粗末な造りで夏用だから隙間風と共に粉雪が吹き込む。夜通しジェット機のような唸り声が喧さく、この分では二日間の停滞も避けられないと覚悟してシュラフの中にいるが寝ているのも辛い。九時の天気図をとり朝と昼を兼ねて餅ラーメンを食べた。運動もしないので腹も減らないし食糧食い延ばしも日

課となってきた。一〇時半頃明るくなり、ちらつと陽がさし一瞬緊張したが気まぐれだったらしくすぐ元通りの吹雪になった。昨日までの温暖と代わり冬型となったため寒くてかなわぬ。居住区の中にも吹込雪が積もりはじめた。テントを居住区に張りたいがテント内は暗くなり読書ができなくなるので我慢している。天気予報は二四日の日曜日は晴れると報じているが、晴れても新雪のラッセルや強風は新たな課題となるだろう。それでも視界さえよければ大深山荘まで明日中に行けると信じている。ただ大深山荘は平屋なので埋没していると思われる。風雪が鎮まったら空身で偵察ラッセルをして明日の好スタートに備えたいと思っているが、なかなか鎮まらず無理して出てもラッセルがすぐ消されて戻れなくなる恐れもある。今回はホエブス、Wガスを使わずカセットボンベのバーナーを試みている。それは装備の軽量化を意図しての事であり又、ガソリン漏れや食品への臭化を警戒したのだったが、低温下では火力が低くパワーが劣る。そこでやはりテント内での使用が望ましいことになるが鼠にテントを齧られ穴を開けられることが心配なのだった。大雨で雪面が減退したかと思われたが新雪がどっかりと積もり又元通りになってしまったようだ。小屋の三方の窓から周囲の状況を時々観察している。吹き込み雪を箒で集め窓の外に放出する。別の窓から身を乗り出してコッヘルに炊事用の雪を採取したりする。いつもブナの樹幹が吹雪で霞んでいて時々見えなくなり山は大荒れ模様である。とうとう二日間の停滞も暮れようとしている・・・明日の天気值得期待し大白森山荘三日目の夜となり寒冷前線通過後の寒冷に対抗して室内にテントを張りその中で睡眠をとった。

三月二四日

六・〇〇の出発を目指し四・三〇に起きて炊事、飲料水作り、テルモス給湯、ザックのパッキング、服装備、ワカン装着など決めて、小屋に入って初めて小屋を出た。三泊二日間の停滞、時間を計算すると二一日の七時間、二二日の二四時間、二三日の二四時間、二

四日の六時間と一歩も外に出る事なく六一時間を沈殿していたことになる。これは今回縦走に予想した停滞分に相当することとは言え、これ以上の停滞は許されないとどこまで来てしまった感が深い。曇天ながら無風の出発であった。少し風があった方が気分的にはいいのだが、森の中はシーンと静まりかえって黒いブナ林が不気味な世界に映る。出発から地図磁石で針路確認しつつ深雪のラッセルだ。

葛根田外輪山脈の最低鞍部、一〇〇〇メートルを切る地点へまず最初のアタックである。九五〇、これが外輪の最低鞍部で尾根はいきなり右へ鋭角に曲がり込む。この円弧を描く山脈はちょうど神秘の湖、日本一深い田沢湖がすっぽり入って余りある大きさなのも不思議である。この深度実に四二三メートル、その湖面が二四九メートルだから海拔下一七四メートルも地球に刺さっているのか？この地形は古いカルデラ地形に思われるのは私だけだろうか。太古の昔は噴煙を吹く阿蘇形の火山ではなかったか。その底には噴火の名残りの地熱発電所もある。底部六五〇メートル、その器に水を注ぐと水面は平均標高の一〇〇メートル近くに達する。神話が生まれそうな相互の関係の妄想……。尾根上には幾多の湿原が散在する、田代平、小白森、大白森、大白森の西と北に姫瀉などの沼八瀬森、それに別の大白森、大深岳西面、栗木ヶ原など規模の大きい湿原地帯も大きな特徴であろう。

七・五〇、大沢森一一七八メートルに到着。天気は依然として曇りであり葛根田外輪最高峰の曲崎山は雲をかぶって稜線見えず。小屋より約三キロメートルを一時間五〇分を所要する。やはり新雪ラッセルと方位決定に随分時を食われているようだ。大沢森から今までの北上進路から東北東に変針し一一〇〇程の曲崎山鞍部へ高度一〇〇メートル程をダラダラと下る。ここで休息とし軽い食事をとる。日が照りはじめて曲崎山全体が輝きだした。ここから見える曲崎山は山全体が真っ白で僅かに岳樺や黒木の針葉樹が散在しいずこの斜面も急峻で旧雪に纏ったばかりの新雪三〇センチ程が剥離せぬかと、とても怖い。それでも行かねばならぬ。活路を見出し出して一時県境をはずす手はどうだろう。それも同じ

傾斜角の山全体を一・五キロメートルはトラバースなのだ。これは長時間同率の危険に曝され続けることになりはしないか、地図では単純そうな斜面だがそうはいかんぞ、沢地形や吹き溜まりなど次々に現れることも覚悟しなければならぬだろう。越さなければならぬ県境の山しかも円錐台型と言うか三角錐型と言うか、この辺りには珍しいピラミッドだ。どこも同じ傾斜角で難攻不落の城砦のように見える。城の石垣に食いつくように高差二〇メートル程の三五度はある新雪斜面にとりつく。さすがに純白の部分は怖くて取り付けない。いくら樹氷のついた樹林に助けを借りてポツリポツリの疎らな木々を繋いで高度を上げて行く。膝までのラッセルでクタクタになりながら一〇時、葛根田外輪最高点一三三八メートルに登りつめた。

これは素晴らしい展望台である。今まで見えなかった八幡平南部の諸峰、森吉山、岩手山、乳頭山、駒ヶ岳、そして近々と俯瞰する葛根田の大内院……ただ畝々と新雪を被って、掴みどころのないその混沌には呆れるばかりであった。田沢湖に匹敵するその広大な森林原はさぞや野生動物の聖域なのではあるまいか、そうであって欲しいと思うのだった。また、倉沢山が北西に近々とこれも純白に輝きたかだか一二九〇メートルの山とは思えぬほどの気高さで明通沢、スズノマタ沢、大倉沢と急峻に尾根を薙ぎ落とし、これも見事なアルペンムードである。

曲崎山は東へ尾根を伸ばし次第に森林帯に高度を落としてゆく。ジャングル地帯で尾根も広く何やら迷宮をさまよう如く進路定まらず右に左に揺れながらコンパス地図と相談ばかりしている。天気はよくともジャングルで尾根が曖昧だところも難しくなるものか、おまけにラッセルと曖昧な平頂が二つ三つ続くと目標とする八ツ瀬森はこれなのか、あれなのか判断がつかなくなってくる。時間的には随分進んだつもりがそれ程進んでいない意識のズレもある。一一六七Pで八ツ瀬森と判断できる山を眺めた。八ツ瀬森は黒いタンネの森で山とは言えぬ……やはり森の盛り上がりだ。この頂上は平ら状だし、しっかりジ



八幡平の雪原

ヤングルだし、県境は北上して西端に達し東進。そして南下する迂回路で地図通りたどるのも困難なので迂回は省略しトラバスで八瀬森山荘へ南麓横断の挙に出た。五〇〇メートル程のトラバスだが深雪と途中二、三箇所沢の横断があり楽ではなかったが、一応作戦は成功し一二・〇〇、八瀬森湿原に出られた。同時に八瀬森山荘も発見したがこの立派な小屋には泊まりたくともパスで先を急ぐ。現在ここまで九キロメートル程歩いたか。この小屋を見るとああここに夏径が埋まっているんだの感を深くしたが、小屋以外の夏径をイメージするものは大白森山荘以来目につかなかった。従って未踏の尾根を縦走している気分を味わっていたものだった。ここから一一六八Pに向ったのだったが小屋を遠く見ながら湿原を廻り込んだつもりで歩き続けたら廻り込み過ぎたのか又小屋が見え出して慌てた。八瀬森湿原向かいの一一六八P頂上で一本、一三・〇〇。

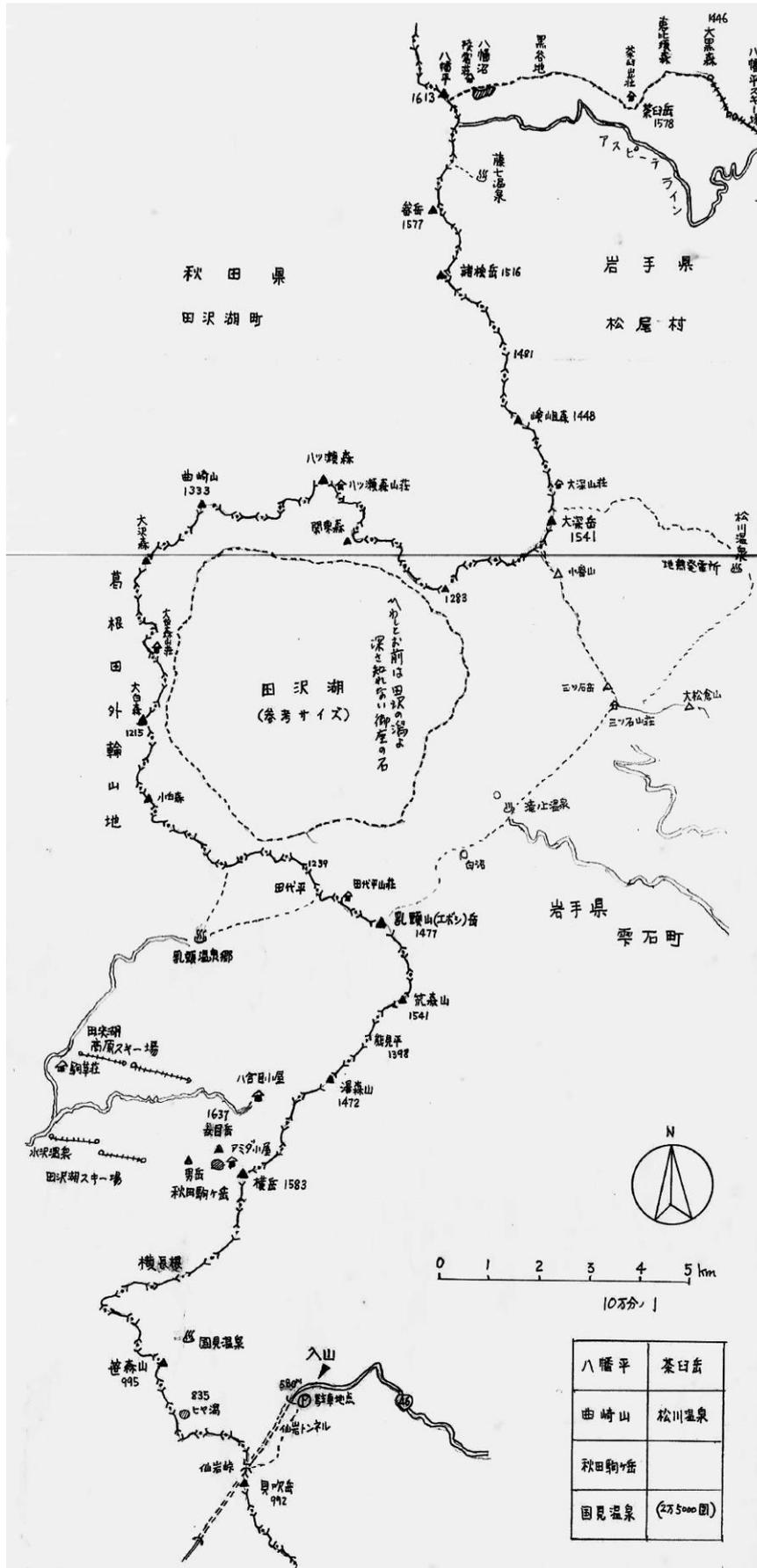
次なる目標は関東森一一五四メートルも八ツ瀬森同様平べったい尾根の盛り上がりで森林が疎らなのでやっと視界も得られ午後後の高温に喘ぎながらラッセルを続ける。ワカンは着雪でブレイキングされそのペースに口惜しい思いを募らせるばかり。結構な巨木などもあって広葉樹林もここから針葉樹林に代わる境界らしく思われた。関東森一四・〇〇。関東森を折り返すように曲がり込んで東進し瘦尾根っぽくなって県境をゆく。前方に大白森が広い台地状で目立ってくる。一四・四〇、一本。天気良すぎるとは罰当たりだが暑くてウール長袖の下着一枚で汗はしたたる。一五・二〇、対岸の大白森とはほぼ同高の一二八三地点を通過中。迷いの多い今日の日程は新雪ラッセルと酷暑のために大深山荘には達せられずテント場を捜す時間帯に入って行く。二万五千図「曲崎山」から脱出できずにビバークとは残念至極だがそれだけ善戦したのだし身体も疲労しているのだから仕方がない。一六・五〇、大雪田の真っ只中にテント設営を決める。雪田の奥まった所に一塊のトドマツがあり一応風対策としてその樹間に設営完了。日は傾き黄昏が迫ってくる。なるべく明るいうちに夕食を済ませて就寝前のキジ撃ちにテントを出てみると桔梗色の北天に

巨大な星を見つけて驚いた。何ごとぞ、この光りは！……そしてハタと気がついた。これぞ百武彗星ではないか。一等星が十個も二十個も固まって輝いている感じだ。仙台の空では捜しあぐねたその星に大深岳で巡り逢えるとは……念願叶ったのは嵐が過ぎ去った山の頂きだった。あゝ畏敬の念とはこんなものか。満月には及ばぬが生涯に何度と恵まれぬ超巨星をこの秘境で拝めるとは思いがけない幸運だった。宇宙の神秘そして悠久の世界の一片鱗を思い我もまた今を一番輝いているのかとも思った。ど肝を抜かれて立ち尽くしていたが、我に帰るとゾクゾク寒くなってテントにもぐり込む。食料箱も軽くなって五日間の経過を物語りあと予定の二日分となった。五合パックの酒も軽くなった。風も凧ぎ静かな夜が来た。明日は余り天気は望めないので心配である。とりあえず大深岳一五四一メートルを登り、ある程度の視界が得られれば予定通り県境を北上し畚岳付近で幕営か、陵雲荘まで行けたら理想だ。悪天の時は縦走を放棄して大深岳を東進し松川温泉へエスケープするか。でないと予定日数をオーバーし連絡本部が出動するともなり兼ねない。明日はこの二つの分岐点となるのだ。

三月二五日

六・一五、テント撤収出発。風は強くないが視界はやや狭い。雪原の中にトドマツが点在しその先はガスっている。どんより雲底がおりてきつつあるようだ。殆ど平らな雪原をコンパスで方向を決めて針路を守ろうとするが樹林とその付近の雪の風蝕の凹凸でそれを避けたり突切ったりして行くと次の進路が狂っている。何度も繰り返しているとワンデリングに陥っていく恐怖を感じる。一旦ラッセルを辿ってキャンプサイトの樹林に戻ってみる。

六・四五、赤布とテント跡を確認して再びコンパスを片手に大深岳の頂上をめざす。少しは見えていた周囲も樹林がなくなりシユカブラだけのホワイトの世界となって行く。細



かい雪がパチパチ叩くように飛んでくる。ホワイトの世界は周囲数メートルの半径内しか見透せない。狭視界となつて主稜県境は風が強まってきた。稜線といつても平たい饅頭とどうか雪原状態なのでこのままでは危険で望む方向を確実に辿るのはどんなにか困難な事を知るのであった。複数の人がアイザイレンシ殿りがコンパスで舵をとるような事をしなければ直進は覚束ない。

主稜尾根に達したと思われるのが七三〇である。出発して一時間一五分かかっている。高みへ高みへシュカブラを踏みしめ踏みしめ登っていると何だ？シュプールがあるぞ、こつちにもあるぞ。誰か最近スキーで来た奴がいるんだ。さてどこから来たんだろう。一番近いところは松川温泉？八幡平から遥るばる来たか。シュプールを辿れるものなら嬉しいが、視界は殆ど盲目状態の自分にとつてシュプールは救いの神かと期待感を一瞬抱いたがそれも儚いこと、堅雪のシュカブラ地帯で頼れるシュプールなどなかったのだ。頂上は平坦な雪原なのでどこを頂上とするか。頂上に辿り着けるか甚だ心もとないが、ここらかと立ち止まってみると僅かに標柱が雪原に露出している。何とありがたい。地獄に佛だ。七五五であった。藤七温泉4・5K三ツ石山荘5Kとプレートが打ちつけてある。その下を見たい。大深岳山頂という字を見て安心したい。ピッケルで掘りにかかるが岩石のように堅い雪は五センチ掘るのも容易ではない。五〇か七〇センチも掘るには何時間かかるか知れたものではない。去年の秋の偵察で大深山荘で引き返したが、この頂上を見極めておくべきであった。それにしてもこの標柱は山頂標柱に間違いなさそうだ。山頂標と信じなければこの次の行動がとれない。風雪は益々強まりできるだけ早く高度を下げるべきであった。弱音を吐くわけじゃないけれどここが単独行の辛いところ、主稜をはずしてエスケープが必要不可欠の課題となつてしまった。付近の地形を偵察して幽かなワツパの踏跡をたどりもう一度先程の山頂標の黒い柱へ戻る。これを起点にコンパス航法を確実に行うためだ。源太ヶ岳まで県境をはずれて東へ二〇〇〇メートル行けば急激に高度を下げられるの

だが源太へのルートも巾の広い尾根である。確かに風の向きも変わり東進に移ったのが実感できる。視界周囲数メートルの行動が続く。右手南面は切れ落ちている筈だが雪庇が発達していて墜落やクレバスの陥穽の危険がある。ホワイトアウトの中では雪庇か雪面か判断つけにくい。行く手が急に無くなった。ガツタリ尾根が落ちるのだ。行くべきか、止まるべきか。ザックをデポし偵察に行く。斜面は続く。方向はいいのだ。源太ヶ岳の鞍部か？風当たりが強い。こんな状態で風と闘い心身を疲労させてなお無益な盲目行動を続けていいものか。少しでも風の弱い場所にテントを張って停滞することが遭難防止の鉄則ではないか。しかしこの吹き曝しの中でテントを張れるものだろうか。瞬時にテントを吹き飛ばされれば本当に遭難確実となってしまう。だけどそれを恐れず確実にやることだ。安全策をやりながらそれを実行するのだ。進退極まれりとの判断で少しでも風衝の弱いところと動き廻ったがそんな所はない。身の丈にも満たぬ僅かな樹木の蔭を求めて迷いを払いここぞと意を決する。多少土木工事を行い斜面の氷雪をならす。樹氷を砕いて樹幹を出してテントの張り網を結びつけてアンカーとする。ポールを二本延ばす、テントにポールを通す。はじめは割に風も弱くいい場所だと思つて作業を進めるうち風がやたらと強くなってきてテントは凧のように舞い上がる。これを失ったら我が命が危ない。舞い上がるテントを押さえてもう一本ポールを通す。風と闘っているのか、テントと格闘しているのか、それでも何とか制圧した。風下側からザックを入れてアンカーとなった。イイゾ、ウマクイッタ。外に出て綱を締め直し枯れ枝を雪面にうめ、もう一方の張り綱を固定する。水造り用の氷塊も五つ六つ入り口にデポしテントに入る。ああ助かった。

オーバー類を脱ぎ、暫くは疲れて横臥して息を整える。睫毛や髭の氷も弛み指で取り除く・・・そう、以前にもこんな事があったなあ。あれは東焼石岳山頂付近だった。僅かなブッシュにテントをアンカーして次第に潰れていったテントの中で息をしていた。テントはシュラフの鞘、シュラフカバーでしかなかった・・・嵐が去れば晴れが来るんだ。あし



たの行動を地図上で読んでおきたい。夏径は地図上に明記してある。松川温泉から湯の沢  
添いに道路（建設中の道路記号）が九五〇コンター付近まで伸びている。この道路へ何と  
か下れば松川温泉に出られそうだ。地図上に明日の予定線を書き込んでみる。源太ヶ岳と  
上倉山の鞍部というよりは中間地点へは湯の沢の沢の支沢が来ているので上部を巻気味に沢  
に迷い込まぬこと。源太の下りは急斜面と吹溜り地形で雪崩の注意。上倉山から続く断崖  
線の上を伝り南下することなど検討してエスケープの自信を深めた。

風雪は終日吹き荒れた。体力回復の為シユラフに入って休養とし燃料の節約と読書に努  
める。バタバタはためくテントの音、ドンと衝突するような風衝音。持ち上げられるテン  
ト底。しなる金属ポール。張り綱よ切れるな、テントよゴアよ裂けるな。ポールよしっか  
り。と神佛に祈る気持ち朝から夜中持ち続けた。風洞実験的試練にゴアエスペースは立  
派に耐え忍んでくれた。

三月二六日

朝からの停滞で半分眠った状態であり、夜になっても熟睡できず八幡平を越えて行く地  
球の巨大なエネルギーの咆哮にただ屈伏するばかりであった。強風と堅雪の為か積雪は殆  
どなくテントの底に吹き込み雪が若干たまり寝床が具合悪くなった。はためくテントと振  
動で昨夜は殆ど眠っていない。辛さをまぎらわせるのにイヤホンで深夜の放送ばかり聞い  
ていた……。夜明けが待遠しい、そして夜明けも近い。堅雪で思うように掘れなかった  
片方の張綱の埋木、いつまでアンカーしてくれるのかズーツと心に引つかかっていた……。  
風圧で引っこ抜けたらそれが連鎖的にテント破裂、絶体絶命とならぬようにと。あん時か  
けた小便が効いたに違いない。ああ小便に神宿る。テント内は着霜で真っ白だった。

朝食を早めに済まし、まだ止まぬ風の脅威にビビリながらベンチレーターから外界を覗  
いて偵察する。おお樹氷群が目の下に展がっている。風は同じだが視界が開けてきたのだ。

行けるぞ、今日は脱出の日だ。生還ルートを拓くのだ。視界はかなり効いてきたがテント撤収にはこの風では難しい。それでも何とか撤収に成功し八・三〇ビバーク地点を出発する。どんな所に幕営したのか、白魔が去り今や解答が歴然となった。まあよくぞこんな所に、そしてよくぞテントがそれに耐えたものぞ・・・当たり前だ、どこにも逃げる所なぞありはしないのだから。空が明るくなり荒天後の新しい樹氷の世界に甦ってそれはまあ素晴らしい風景が具現していた。撮りたかったが陽がささないので諦めた。

地点は予想どおり大深・源太の鞍部へ下りにかかる地点であった。すぐ鞍部への下りにかかり夏径の凹みと見える尾根筋が源太ヶ岳へと続いている。岩手山の雄大な山容が屏風尾根、鬼ヶ城尾根を巡らせて重厚な風格で遠景を保ち豪華な構図である。源太ヶ岳は大深岳より僅か三・六メートル高くその東端は急斜でもって薙ぎ落ちる。降り口に大岩があり標識があった。東斜面は深雪に吹き溜まり白一色で気味が悪い。高度差二〇〇メートルは雪崩の危険大と見て、どう乗り切るのが課題でもある。白一色で岳樺等僅かに縫って行くが、最大傾斜線を辿っていけば沢地形に迷い込むのでどうしても斜めにトラバースが必要になる。傾斜のやや緩んだ所で北に向かってトラバースし、黒い針葉樹林へ入って行く。沢の源頭が集まっていて絶対沢へは寄りつかぬと決心していても避けられぬもの、二つ程沢状地形を突破する。深いラッセルは続くがナーニ下りのラッセルだ、能率は上がる。途中松川地熱発電所の巨大なお釜から蒸気が吹き上がるのが望見された。

針葉樹林を抜けると上倉山一三五〇メートルから連なる断崖線にぶつかると。しばらくそれに添って下るうちに広葉樹林帯となりブナの純林を急降下していく。湯の沢の対岸山腹に道路がありクリーム色の鋼橋梁が良く目立つ。それを結んだ線上を下っていけば必ず道路と交叉する筈である。源太ヶ岳から高度差六〇〇メートルを下り切り道に着いた。南向きの急斜のバーンは下る程雪が軟化し、ワツパは片方で数キロの雪塊が粘った。路上は一メートル位の雪で覆われていて傾斜のなくなった道路上も水分の多い深雪でワツパは重

たい。

やれやれこれで帰れそうだ、この路形をニキロメートル歩けば松川温泉に着く。テクテク歩いてやがて松川地熱発電所のお釜が見えてきた。右手に眺めながらなおもラッセルを続けていくと赤錆色の屋根が現れ松川温泉に来たらしい。八幡平樹海ラインの道路案内板があり背景にして記念撮影を一枚。林道歩きのうち暗くなり、俄雪となり先程まで見えていた源太ヶ岳の白峰も見えなくなった。松川温泉峡雲荘についたのは一〇・五五であった。

バス停の標識と除雪作業に従事する宿の人々の姿があった。一メートル余の段差でアスファルトの黒い道路が人里へ都会へと続いているのだ。バスは五分前に発車したばかりであった。一日三本のバスが往復しているらしい。ちよつとがっかりしたが気を取り直し、次のバス一四・四〇を待つことにしよう。取敢えず連絡本部に電話をしなければならぬ。あーア、三時間半も暇があるぞ。一部屋を借り昼食も予約した。それから峡雲荘の白い露天風呂に入った。仙台との連絡もついたし八日ぶりのお風呂で疲れも消し飛び窓の吹雪を眺めながら安堵の情にひたっていた。

お料理は一二時前に来た。「ホロホロ鍋定食」ということで当地名産のホロホロ鶏の鉄鍋に固形燃料を灯してこれは珍味！岩魚焼、地竹煮込、刺身、酢の物、わらびおひたし、御飯、お新香とみな御馳走だ。天国だ。満足して周囲を見廻すと鏡があった。誰だ、あゝ俺だ、驚くんじゃないよ。ネパールの顔がそこにあった。ホームレスだってまだマシだ。いや俺が一週間のホームレスだった。テント三泊、小屋三泊、死に損ないのホームレスだ。ホームレスなんて軽蔑するんじゃないよ。太陽と雪の反射で爛れた人相、栄養不足と疲労と睡眠不足でやつれた表情・・・宿の人も驚いたに違いない。鏡を見なけりゃよかった。公共機関で都会へ帰るのが苦痛になってしまった。まいいか、露天風呂でまた江刺追分でも唸ってウサを晴らすか。



八幡平 凌雲荘

時々轟音を発して間欠泉なのか噴出音がする。降ったり照ったり温泉の午后、ボンネット型のイズズバスが到着した。後輪にチェーンが巻きつけてある。一四・四〇、たった一人の客を乗せてバスは発車した。板の間のフロアの上にまだ凍ったワッパ・ピッケル、チャリチャリとチェーンの音快く雪の壁にこたまして走れトロイカ鈴の音高くくぐだ。

八幡平ロイヤルホテルで盛岡行に乘換え、盛岡駅前では四五分の待ち合せ。仙台直行の急行バスは五分遅れで一七・四五発車。七人の客でガラ空きのバスは東北自動車道を仙台へ。八・一〇仙台着。

帰宅して調べたら次の食料が残っていた。

干魚コマイ二枚 塩辛五〇g 味噌四〇g 梅干二ヶ チーズ三ヶ ピーナツ一〇〇g  
ドーナツ一五〇g ボンカレー わかめ三回 チョコレート二〇 貝柱一コ カロ  
リーメイト四箱 キナコアメ七ヶ キャラメル三ヶ プルーン二二五g コンブダシ一  
本 ハゼボー一二〇g ニンク錠二〇ヶ ほんしお二〇g

また燃料など、カセットボンベ二／三本、ローソク、電池単三、単四 各四本。バック。  
使わなかった装備、雪洞鋸。ぜいたく言わなきゃ二日分食いのばし可能だった。

未踏部分縦走後日談、八幡平の縦走は大深岳から避難ルートで脱出となり一／三区間が未踏となり残ってしまった。そこで未踏区間を繋ぐための対策を考えていた。

四月二一日(日)

未明三時、自家用車で出発。八幡平バスセンターまで車で駆ける。付近に駐車しそこからバスを利用して八幡平スキー場に出てリフトを利用し茶臼岳、八幡平頂上、畚岳、諸椈

岳、大深岳、源太ヶ岳、松川温泉へと下山しバスで八幡平バスセンターと循環する予定であった。駐車地点を捜したりしていてバスを逸して予定が狂ってしまい取り敢えず茶臼岳まで登って様子をみようかと決める。リフト二基を乗継いで、スキー客の算える程の静かなグレンデを後にする。今冬は遅い大雪が何度も降りスキー場をはずれると深いラッセルが待っていた。茶臼岳を往復し積雪の工合を確かめて今回はおとなしく再挙を誓って下山した。このラッセルでは前途多難と判断したのだ。八幡平バスセンターまでのつもりで夏タイヤで来ていたので八幡平スキー場まで登る道中、天気よけれど雪はちらつき道路一部凍結していたし駐車場内は圧雪で怖いおもいをした。

四月二十六日（金）

未明三時出発。四号線北上。盛岡から八幡平バスセンターを目がけて疾駆する。バスセンター筋向かいのアパート群の一隅に駐車。バスセンターではアスピーテラインの開通式とかでバスの前部に祝賀の飾りつけを施し賑やかだった。東北の山々は五月連休も近いと言うのにその後もしばしば雪の積み重ねがあり近年にない雪の豊作である。

九・三五、グレンデには数人のスキーヤーが散るだけで閑散そのもの。リフト乗り継いで終点に着く。天気はとてもよい。スキーのシユプールがありワカンも歩きよい。約一時間、一〇・三〇、茶臼山荘ナンバー80に到着。勿論小屋は無人で伸々と息入れる。小屋の裏から縦走路の白い帯を緩く降りて行くが、快晴無風で展望も素晴らしい。吹雪けばさぞや難儀するであろうアオモリトドマツの平坦な台地を西進する。一一・三七、源太森頂上。小高い盛土のような展望台である。遥かに陵雲荘の屋根と純白の雪田は八幡沼である。

一二・二〇、陵雲荘に着く。大きな山小屋で四間×四間の広さ、中二階もあり台所もある。ここで昼食休憩とする。高みへ進んで行くと八幡平頂上に通ずる竹竿標識が並んでい

てそれに従い一三・三〇登頂。頂上から駐車場まで一〇〇〇メートル程、太い物干竿のような案内棒が多数雪面に立ててある。今日は観光シーズン開幕なので雪見の客が多数訪れたらしい足跡が点々と続いている。南へ縦走するので駐車場の人混みを避けては通れない。大型バス乗用車などが駐車場に何台か来ていてスキーを担いでいる人もある。雪壁の底に黒いアスファルト道路が現れていて何米もある切り立った雪面を歩くのは危険を伴うのでやむを得ずワツパは脱いで道を歩く。道路は一〇〇〇メートル、藤七温泉へ曲る畚岳分岐からワツパを着ける。雪の回廊は数メートルの壁の中、こっちの道は二台の車が通っただけで全線開通しているのかどうか？この道路は松川温泉に通じる樹海ラインの一部に当たり、もしかすると未開通箇所があるのかも知れない。緩やかに畚岳目がけて登り畚の肩でザックをデポし空身で頂上一五七七メートルを往復する。人間はもう誰も来はしない八幡平の守護神の上からの展望は三六〇度独り欲しいままにして唄をうたいつつ下る。少し形崩れの樹氷群を左右に眺めながら次は諸脛岳一五一六メートルに駆け上ったのは一五・〇〇。どこが頂上やら判らぬ平原状で南端がやゝ高い感じがする。南東方向に向って約二キロメートル、四〇分かけて一四八一メートルの無名峰に立つ。名だけ厳しい峻岨森を通過しワツパは順調に縦走を続け小さく尾根の見える大深岳へと接近する。

諸脛岳から三キロメートル、少し日の傾いた一六・五〇、大深山荘に到着。どっぷりの雪に埋まり赤錆色の屋根だけが露出していて小屋に入れぬのではと心配したが廻り込んでみると南側にもぐり込める空間があり小屋に入ることができた。入口に常備のスコップがあり除雪作業に使わせてもらった。製水用の雪塊を持ち込み早速泊まりの準備にとりかかる。小屋は三間×三間半でトイレがついている。余り綺麗ではないがけっこうな小屋である。暗いので再び外に出て窓の部分をカットし二ヶ所から採光することにした。炊事・夕食の後、担いで来たせつかくのテントなので板の間に張り寝ることにした。静かな大深山荘の夜だった。それにしても今年この小屋の一番乗りの名誉は私だったらしい。

四月二七日（土）

小屋内のテントとゆうことで熟睡できて満足であった。独り者のブレックファストなんて簡単なもんだ。おにぎりを溶かしてわかめと味噌で煮込み生卵を落として出来上がり。八・二〇、小屋を出発する。トドマツが沢山頭を出している緩斜面を登り切ると大深岳の平頂である。八・五〇、この辺かと思うあたり山頂標があり前回つけた赤布が翻っていた。あの時のホワイトアウトは随分過酷な体験だったが今日はあの日から一ヶ月を経過し、春日燦々と照り幸福に包まれての縦走である。テント破裂で死ぬかと思った思い出のビバーク地点を通過する。雪量は増えこそすれ減ってはいないなと思った。一ヶ月前とは樹氷が崩れていることやシユカブラが角を落としたくらいの変化であろうか。

九・二五、源太ヶ岳の上を通過し降下にかかる岩頭につく。前回同様のルートで深雪の東斜面を降下する。前回偵察済みなので迷うことなくルートを辿り針葉樹林帯から広葉樹林帯へと断崖線尾根を駆け下る。小倉、三ツ石、大松倉、犬倉、黒倉、屏風尾根、岩手山の連嶺がどんどん聳えてゆく。源太の岩頭から二キロメートル、高度六〇〇メートルは呆気なく例の湯の沢林道に着く。一〇・一五。車道は除雪されアスファルトが融水で黒く輝いていた。ワカンを下げて松川温泉峽雲荘まで二五分、順調に推移してバス停の時刻表をみると今日からバスダイヤが全く変わって間に合った筈のバスはなく二時間の暇を生じた。それではと峽雲荘に上り込み白濁した露天風呂に入り湯上りのビールで独り乾杯をする。一二・三九のバスで八幡平バスセンターまで乗車、デポして自分の車で帰仙の途に就いた。

一挙に全踏破しなかったのに残部を再縦走とゆう結果になり誠に残念、残った部分を繋いだからといって完成したとは言いがたい。しかも一ヶ月遅れとなって辛うじて一線で結んだとて何か心に虚しいものがあつた。しかし今年は今迄稀な多雪の年で五月連休まで度々



八幡平より岩手山を望む

降雪があり夏を経過するも沢にも尾根にも残雪があり越年の万年雪は珍しくないようだ。今回の仙岩峠～八幡平積雪期単独縦走は一部を除いて殆ど夏径がある。そのため無雪期にも未開部分を藪こぎすれば全航程を縦走可能であろう。次には夏期に同コースを歩いてみたいと思っている。冬に偵察して夏期に歩くとは逆転の発想みたいであるが高山植物の豊富な時、点在する湿原を訪ねてゆっくり小屋々々を巡りながら長期の山旅をしたい。

(やまびと季報十四号、十五号に掲載)

